

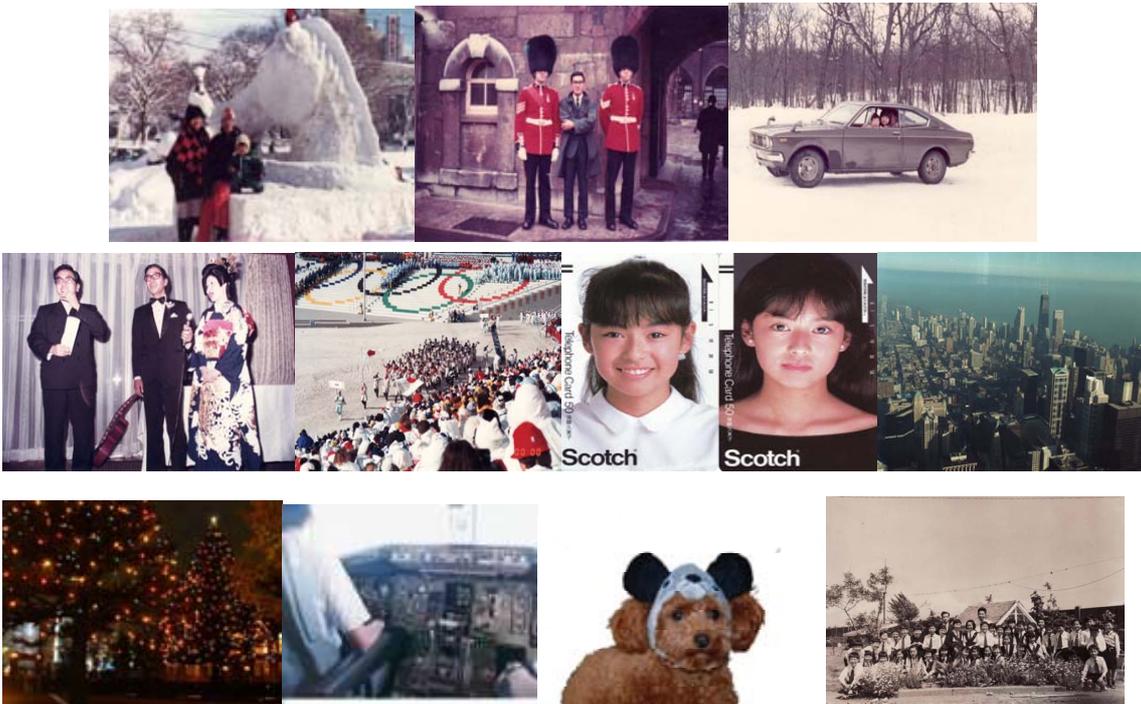


自 分 史

繼 潔



2008年7月13日



自分史目次

	継	潔
まえがき		P1
1. 出生、珍しい名字の謂われ		P2
● 出生地は札幌		
● 父と母		
● 珍しい名字		
2. 過保護過干渉の母(1)－幼年期		P5
● 幼年期1 － 目黒から佐倉へ		
● 幼年期2 － 小学校入学の頃		
● 幼年期3 － 母の干渉が始まる		
3. 過保護過干渉な母(2)－少年期		P8
● 幼年期4 － 漁師町の三崎		
● 少年期 － 私立横須賀学院小学校へ編入学		
● 思い出すのも辛く嫌な中学生時代		
● 中学生時代の少ない嬉しい思い出		
4. 恩師との出会い－高校生時代		P13
● アチーブメントテスト		
● 教師、母との確執再燃		
● 恩師と慕った野平満枝先生		
● 高校生活閑話		
● 修学旅行 － 父からのプレゼント		
5. 浪人生活時代		P20
● 立教大学に目標を定める		
● 代々木ゼミナール在籍時代		
● 受験番号1984		
6. 立教大学時代(その1)		P26
● 教養課程授業に予想もしなかった数学教科		

- 「筑豊の子供を守る会」活動－立教YMCA
 - (1)「筑豊の子供を守る会」に入会
 - (2)「石井好子シャンソンの夕べ」開催、募金活動
 - (3)筑豊閉山炭坑室木神田地区
 - (4)上野英信先生の「筑豊文庫」訪問
 - (5)「筑豊の子供を守る会」活動に思うこと

7. 立教大学時代(その2) P34

- パラリンピック、ボランティア活動
- 立教YMCAの楽しかった思い出
- ミス立教との出会い

8. 4ヶ月で転職－社会人1年生時代 P39

- 希望の銀行に就職できず
- 札幌トヨタ自動車での4ヶ月
- 住友スリーエムに転職－最初の提出書類
- 録音テープ取扱店開拓

9. 大阪勤務時代(昭和44年～昭和46年) P44

- 車で銭湯通い
- カセットテープ回収騒動
- 初めての海外旅行
- 大阪万国博覧会

10. 出会いから結婚(昭和46年～昭和50年) P49

- ホンダクーペ7は欠陥車
- 出会いそして結婚
- 出生届、死亡届を同時に提出

11. 再び北の大地札幌へ－札幌時代 (昭和46年～昭和50年) P56

- 福岡転勤予定が札幌に
- N君との再会－カーリーナを2台購入
- 家庭用ビデオテープの黎明期
- 札幌雪祭りで雪像制作

12. 東京支店勤務時代ーその1(昭和54年～昭和62年)	P62
●大沢商会倒産	
●特約店会発足	
●カルガリー冬季オリンピック	
13. 東京支店勤務時代ーその2(平成元年～平成7年)	P68
●バラエティTV番組に出演	
●ビデオテープ新宿価格戦争勃発	
14. 父の死	P74
●脳梗塞に倒れる	
●寡黙だが息子思いの父	
●死を看取る	
●思い出の通勤路を見下ろす墓地	
15. スピンアウトー医療機器を販売(平成8年～平成11年)	P79
●新会社へ転籍	
●新会社はイメージン	
●シカゴ北米放射線学会	
16. 再度の転籍話、嘱託契約打ち切り(平成11年～平成17年)	P84
●「ドライビュー」コダックへ売却	
●転籍はコリゴリ	
●磁気製品営業に始まり磁気製品営業に終る	
●立教セカンドステージ大学入学を決意	
あとがき	P91
Web版のあとがき (平成25年11月)	P93

まえがき

87歳になる母は左右の大腿部骨折により車椅子生活を強いられ介護度5の認定を受けている。

同居による介護が困難のため横須賀市浦賀にある特別養護老人ホーム「太陽の家2番館」に入居しお世話になっている。

家内が週に1回は横浜の自宅から母に面会に出掛け母の相手をして呉れている。私も月に2回程度は面会に行くのだが認知症の進行した母との会話が成り立たず、10分位の面会で退散してきてしまうのが常である。

そんな私を見て家内から「あなたは一人っ子なのに母親に冷たいのでは、会話が弾まなくても、もっと暖かい言葉を掛けて上げなさいよ、お母さんは、いつも潔、潔って気にしているのに」と小言を頂戴するのである。

自分史を書き始めるに当たり、母の出生、生い立ち、父との出会いを書きたいと思っても全く資料が見つからないし、認知症の進行した母から、それらを聞き出す事は当然ながら叶わない。

母の認知症が進行する前に色々聞いておくのだったと後悔している。

私が歳をとり認知症になった時、母と同様に幼児返りして他人が理解できない事ばかり繰り返し話すようになるのだろうか。

認知症になった私を見て、家内や子供達が、お父さんのこと色々聞いておけば良かったと後悔する事がないよう、私が歩んできた一端を少しでも書き遺しておけたらと願っている。

1. 出生、珍しい名字の謂われ

● 出生地は札幌

米軍の進撃が強まり、戦災から逃れるため疎開が促進され日本の敗戦がまことしやかに噂され始めた第二次世界大戦末期。

昭和19年3月6日北海道札幌郡豊平町に継 茂、菊子の長男として生を受けた。定かでは無いが母は北海道帝国大学の医学部で出産したと思われる。

戦時中のことでもあり、潔い人間になれと潔(キヨシ)と名付けられた。

継家の男児は誠、明、敦、確等々一文字を付ける因習が有り親戚に同姓同名が何人もおり親族が集まる時などは、紛らわしいことこの上ない。

因みに私の長男にも因習の呪縛から逃れられず一文字の淳(アツシ)と名付けた。

札幌には生後2年程住んでいたらしいが、全く記憶が無い。

札幌の地には何か縁があるらしく、社会人一步を踏み出した会社は札幌トヨタであるし、住友スリーエムに転じた後も札幌勤務を経験している。

● 父と母

父、茂は当時月寒(今はツキサムと言われるが当時はツキサップと称した)の陸軍連隊付きの陸軍軍医少佐であった。

住まいは札幌では有名な財を成した伊藤家の別宅であった。

父は帝国陸軍少将松山連隊長、屯(タムロ)とサチの三男一女の次男(長男は戦死)として松山で育ち、のち東京成城に移ったが苦学生であり、軍隊に徴用される事を承諾し奨学金を得、東京帝国大学医学部を卒業している。

因みに祖父屯は髭を蓄え職業軍人としての威厳があり、側に寄るのも躊躇われた人で孫として可愛いがられた記憶がない。

祖母サチも戦後の没落職業軍人の妻として苦労したらしく神経質な暗い感じの老人で笑顔を余り見せる事はなかった。

父は陸軍軍医として中国に渡り現在の地名は不明だが残っている写真によると普集(PU-CHI)、明水(MING-SHUI)附近の陸軍病院に勤務、兵隊や軍関係者ばかりでなく、現地の中国人も診察していたようである。

母菊子は帝国海軍の医者であった若月館一と千代子の四人姉妹の次女で三輪田女学校を卒業、何不自由なく育った典型的な山の手(目黒)の世間知らずのお嬢様氣質で下町育ちの人達、地方の出身者を小馬鹿にする態度性格は年老いた後も、余り変わる事がなかった。

祖父館一は青森県大湊に勤務の折、後の帝国海軍元帥となる山本五十六と懇意にしており数多くの手紙の遣り取りがあり、母の実家には山本五十六の書簡、遺品類が少なからず残されていた。

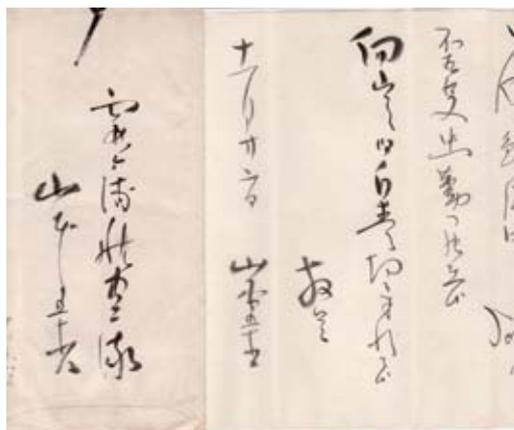
祖父は私が赤子の頃、舌癌で亡くなっており私には記憶の欠片も無く写真で知るのみである。

祖母千代子は常に着物をきて、凜とした人で10人いた私達孫を猫可愛がりするようなことは無かったが、正月には私達が中学生になってもお年玉だけは決まって呉れる人であった。

その祖母が亡くなる1年程前に、歴史的資料価値のある書簡等は本家筋に残したようだが形見分けと称して孫の私に山本五十六直筆の毛筆書簡と、数通の葉書を手渡ししてくれた。山本五十六の毛筆書簡は達筆で何が書かれているのか私には大半判読できないのだが今は私の貴重な宝物となっている。



軍医時代の父



山本五十六の書簡

●珍しい名字

継(ツグ)なる名字であるが注連縄(シメナワ)、胃袋(イブクロ)程、珍名ではないが日本には数少ない名字の一つである事に間違いない。

しかも戸籍上の字体は継であるのでとても書き辛く通常は継で通している。

小学校の頃は継を平仮名で書くと、つぐのつがカタカナのフに似ている処からフグ、フグとあだ名をつけられ餓鬼大将から苛められ、正に本当の河豚の如く膨れ面をして、いじけていたものである。

現在に至るまで初対面の人には九分九厘正確に名字を呼ばれることが無い。ツギさん、ケイさんツズキさんと言われることが多い。学生時代、新学期になり新任の先生が出席

を取る段になると、私のところで必ず一拍の間があり、「うーん何と読むのかな」と聞かれるのが常であった。

現在、公的書類にカナを振るのが当たり前でカナが書いてあるので問題ないが20年位前までは、市役所、銀行、病院等々で書類等を提出すると、何て読むのか悩んで呼び出しを躊躇する係の人が遠目に分かり、待ち時間からすると私の事を呼びたいのであろうと、こちらから気を遣い「ツグですが・・・」と名乗らなければならず、おちおち週刊誌など読んでいる訳にいかず気疲れしたものである。

大学時代、継なる名字の謂われを知りたく人名辞典等を紐解いたが継なる項目が見当たらない。元気であった頃の父母に聞いても「昔、女の子ばかり生まれ跡継ぎがなくなり、占い師に改名を指示され継となった」位の回答で釈然としない。

後に述べる九州筑豊よりの帰途、本籍地となっている長門市仙崎の伯父の家を訪ね真贋の程は判らないが継家の家系図なる巻物を見せて貰った。

家系図によれば源氏から始まり藤原姓そして江戸時代は元禄年間まで中原姓が続き、元禄9年に突然継姓に改名されている。伯父によれば中原家は代々藩主毛利家に仕えた御典医であり、元禄9年中原家に男子が授からず殿様より継に改名すれば未永く継家は栄えると言われ改名したのだとの事であった。

確かに仙崎の継家菩提寺に残る江戸時代の墓石に刻まれた家紋は一見、中原の中をデザインしたもので納得出来なく無いが、継に改名して家紋を変えなかったのか疑問が残って未だに謎のままである。

継家の家系は医者が多く、医者になる事が当然の如く母より口うるさく育てられ、少年期の私の心を痛め続け卑屈にさせて行った

詳しくは幼年期、少年期の項に詳しく記述した。

因みに継姓の人は親類が東京に数人いるが山口県下関市に多いと聞いている。



墓石の家紋

2. 過保護過干渉の母(1)－幼年期

●幼年期1－目黒から佐倉へ

4歳まで東京目黒にあった母方の祖母が住む母屋の離れで生活した。東京大空襲で目黒も神田川近くまで被災したようだが運良く祖母の家は被災を免れていたのも一時的に身を寄せたようである。

父は既に千葉県佐倉町にある結核療養所「厚生園」に職を得、目黒の自宅には月に数度しか帰宅しなかった。

医者とは言え戦後間もない時期、生活に困窮しており、母は何処で仕入れるのか和菓子を手に入れてきた。母に手を惹かれ裕福な家に売りに行くのだがお屋敷の玄関に立つと、子供ながら切ない気持ちを抱いた事が忘れられない。

4歳半の時、一家は千葉県佐倉町に転居した。佐倉は江戸期、堀田家の城下町で父の勤務先の結核療養所「厚生園」は堀田家の広大な敷地跡に建てられており、正面入口には堀田家なごりの大きな黒塗りの門柱が残っていた。

医者達の官舎が建築されるまでは長屋同然の住まいで内風呂もなく療養所職員のために作られた薄暗い五右衛門風呂の共同浴場を利用していた。

又、長屋の右並びの先に牛舎があり6頭の乳牛が飼われミルクは療養所の患者さんに供されていた。乳搾りを見ている時、牛に近づき過ぎて後ろ足で蹴飛ばされ大きなコブを額に作った思い出がある。

暫くして「厚生園」近くの奴台(やっこだい)に新築された平屋の官舎に移ることになった。官舎は四畳半と六畳の二間、台所は流しと二つの竈がある土間作りで質素な家であった。質素とは言え一戸建てで竈焚きの内風呂があり私は薪による飯炊き、風呂焚きを自然と覚えていった。

小さな庭の隅に桜の古木が植えられていて春には満開の花を愛でる事が出来た。長屋住まいが当たり前の時代であったが父が医者であるが故に特別扱いされ一戸建ての家に住む事ができたのである。

5歳になり幼稚園に通う子供が少ない時代であったが本人の意思に関係なく幼稚園に入園させられていた。

一人っ子で母にベッタリであった私は初めて母から離れる悲しさと、背の高い躰に厳しい女の先生が苦手で、おばあさん園長先生がなだめすかしてくれても毎朝母の手を離さず登園を拒否する、何につけても引込み思案で臆病な可愛げのない子供であった。



厚生園時代の私(右から2人目)看護婦さん達と

●幼年期2ー小学校入学の頃

昭和25年6歳になり佐倉第一小学校に入学した。(巨人軍長嶋選手も通った)担任は女性の東条先生、学童に対する処し方、指導が上手な先生で引っ込み思案の私も素直に小学校生活をスタートする事が出来た。

隣の席の子は佐倉町でも由緒ある呉服屋の娘、福ちゃんであった。福ちゃんは美形ではなかったが、お喋りでおしゃまな子で仲良くしてくれたので通学が楽しみで幼稚園の時の様に通学をぐずるような事はなかった。

同級生の中には旧満州から引き揚げて来たばかりの子供達もおり服装はバラバラ、私を含めダニ、蚤持ちの子供が多くDTTの粉を定期的に全身に降り掛けられ回虫駆除のため苦いドロドロの肝油も飲まされた。

生徒の履物と言えば下駄は良い方で草履の子供も多くいた。雨の日に差す傘のない子供もおり、あっても子供には重い蛇の目傘が主流であった。

給食はコッペパンと米軍支給の脱脂粉乳ミルクが出たがこのミルクだけは口が受け付けず吐き気を催し、先生目を盗んではアルマイトボールに入れたミルクを給食室裏の下水口に捨ててに行った。他の生徒も同様なのか昼時の下水口は常に真白な状態であった。



小学校入学の頃

●幼年期3—母の干渉が始まる

優しかった母の私に接する態度が急変しヒステリックに成り始めたのは一年生の夏休み前頃からで、友達と買い食いしてはいけない、紙芝居は観てはいけない、サーカスを観に行くと人攫いに攫われるから行ってはいけない等、いけないづくしのオンパレードである。当然のこと、駄賃も少額しか渡してくれない。

更に凶画や習字教室に私を無理やり通わせ始め私から子供が望む自由で楽しい時間を奪ったのである。

母はどこで聞き出して来るのか「厚生園」病院長のT先生、向かいのA先生の子息子女と私の通知表の評価を比較し、私の+2の数が子息達より少ない(当時は+2、+1、0、-1、-2の5段階評価)と知るや、付きっきりで私の評価の悪い課目の勉強を教えることに熱を入れる用になって行った。

母の楽しみ生き甲斐は私の成績が良い事、凶画や習字で金賞を取る事にあり、銀賞、銅賞では問題外、金賞が取れないものなら不満の矛先を私に向けてくるのである。

母はPTA会合の際、廊下に展示されていた私の習字に金賞が貼られているのを確認大喜び、私とその習字を持ち帰った時、金賞の紙が剥がれ落ちているのを知るや「金賞の紙が無い何処へやったの」と大騒ぎする始末である。

私は子供ながらに、高が金紙の切れ端が何になるのか何を騒ぐことがあるのか不思議で母の態度を全く理解出来ないのである。

母は文句を言わない私の本当の気持ちなど少しも思いやらず、医者の子息を何が何でも医者にさせたく否、させなければならず、親戚に良い顔が出来ないと世間体ばかり気にして他人の子供より成績が良いことを狂信的に願う人であった。

「将来の夢」と題する作文の宿題があれば、医者になる事を書くよう強要され、電車の運転手さんになりたいという私の文章が消しゴムで消され書き直しさせられる。自分の小さな夢が無残にも壊され書き直される私としては堪ったものでなかった。

この様な母の行動は当時、脊椎カリエスを患い二子目を産む事が叶わない事に起因し、一人っ子の私に全てを賭けざるを得なかったからと思われる。

そんな過激とも思われる母からの干渉を慰めてくれるのは、父が病院の職員から貰ってきてくれた牡の黒毛の雑種犬であった。

私はその犬に「くろ」と名をつけ、「くろ」と散歩に行くのが唯一の息抜きの時間であり「くろ」に母の悪口を話し、「くろ」から母の干渉を癒してもらう日々を過したのであった。

その「くろ」とお別れする日が来る。父が神奈川県三崎町に新しく建設される三崎町立国保病院の初代院長として赴任する事になったのである。

「くろ」を三崎に連れて行くことを母に泣いて頼んだが、暫くは仮住まいで犬は飼えないとの事で願いは叶えられなかった。

可愛がった「くろ」がその後、元気になっているか父に消息を聞いて貰うと「職員の人達に殺され食べられてしまった」との返事に、あの「くろ」が殺され食べられた？残酷な大人に幼い心を痛く傷つけられたのである。

当時、黒犬の肉を食用にする人々がいたとはいえ、本当に人間が犬の肉を食べて仕舞うとは信じ難いことであった。

1. 過保護、過干渉の母(2)－少年期

●幼年期4－漁師の町、三崎

昭和27年1月、小学校2年生の3学期を迎える直前に神奈川県 of 町立三崎小学校に転校することになった。

父が三崎町立国保病院の初代院長として招聘されたことによる転校である。

早朝、東条先生以下、福ちゃん、クラスの友に見送られ京成佐倉駅から上野、東京駅経由横須賀線の横須賀駅、更に京浜急行バスと乗り継ぎ三崎町に着いたのは昼も大分回った頃であった。三崎町へと走るバスの車窓から生まれて初めて見るキラキラ光輝く大きな海、遠く伊豆大島、近くには城ヶ島が見えたのを今でも目に焼きついて忘れる事はない。

海の見える余りにも遠い場所に来たことで、二度と佐倉小学校の友達に会う事は叶わないのだと思うと悲しみが新たに込み上げてきたのであった。

医者向けの官舎は建築中で荷物を解いた先は、マグロ遠洋漁船乗組員のMMさん宅の八畳間の一室であった。

ご主人が年の半分は遠洋航海に出ており空き部屋を一時的に提供してくれたのであったが、ご主人が航海から帰宅された後も暫くお世話になっていた。

MMさん宅では台所を共有、内風呂も無く生まれて初めて銭湯通いをして、湯船の大きなこと、湯船の上の壁面に描かれた富士山にびっくりしたものである。

担任の先生は背の高い美人で独身のM先生。私が転校生とあって暫くの間、毎朝クラスの生徒を連れ家まで迎えに来てくれたことが、とても嬉しくて直ぐに新しいクラスの友達に溶け込むことが出来た。

しかし、それも束の間3年生になると優しくったM先生から、既婚で生徒に笑顔を見せず冷たく接するS先生に担任が変わった。

クラスの男子生徒の大半は漁師の息子達で気の荒い連中が多く、ひ弱な性格の私は虐めの対象となりM先生時代と異なり学校生活に馴染めない友達の出来ない、いじけた少年として日々を過す事になった。



三崎時代、中央はMMさんの奥さんと赤ちゃん、右端母

● 少年期－私立横須賀学院に編入学

昭和28年4月、私が気がつかない3月に願書が出され、訳も分からず面接試験に連れ出され何とか合格し4年生のクラスに編入転校したのが私立横須賀学院小学校であった。同時期の編入生は3, 4人いたはずである。

母は病院長の妻として漁師町の小学校に馴染めない私を見るにつけ、少しでも生徒の質が揃った私立の学校に入れたかったのだ。

横須賀学院は昭和25年、青山学院横須賀分校専門部の校舎を譲り受け創立されたキリスト教プロテスタント系の幼稚園、小学校、中学校、高等学校を併設した男女共学校である。

校舎は元々、第二次大戦中の兵舎で大変みすばらしいコンクリート作り3階建ての建物が数棟とチャペル、幼稚園舎があるだけであった。校庭は整地が悪く小石がごろごろしており、お世辞にも学校の校庭と呼べる代物で無かった。それでも児童達は元気よく遊び回っていた。

当時、私立の学校へ通わせる家庭は稀で、生徒はキリスト教教育に理解ある家庭の子供、あるいは医者、歯医者、会社社長、市会議員等の子供達が横須賀市内だけでなく鎌倉、逗子、金沢八景等から通学していた。

校庭に隣接して日露戦争で活躍した東郷平八郎率いる旗艦「三笠」が保存されている三笠公園、校舎最奥には金網の塀で隔てられた向う側に米海軍横須賀基地が広がり、校舎の近くに基地病院があり朝鮮戦争当時には負傷した兵隊がよく日光浴を楽しんでいるのが見られた。カトリック系の清泉女学院も隣接していたが清泉女学院の女生徒は吾が校舎側に近づくことはまずなかった。今は埋め立てられているが正門前は小さな入り江があり海沿いの道が通学路であった。



昭和30年当時の三笠公園

転校によって生まれて初めてのバス通学、三崎から横須賀への道路は大半が未舗装、ガタガタ道をボンネットバスに揺られ片道小一時間を要した。

しかし、通学時間が苦にならずに済んだのは、中途編入学にも関わらずクラスの生徒達が心優しく私を受け入れ接してくれたからである。

1クラス35名程度、2クラス編成の学年で、三崎の小学校とは異なり大半の先生が実の親のような存在であり生徒は兄弟姉妹のように伸び伸びと育てられた。

創立後間もない私立学校ゆえ、先生方も全人教育に心がけ良い学校にして行こうと一所懸命であった。

心の落ち着きを得たことで、相変わらず勉強、勉強の母の厳しい躰も余りに成らず、何とか6年生2学期頃まではクラス内で上位の成績を維持していた。

編入時のクラス担任は女性のS先生、割り算が計算できず放課後たった一人で職員室に残され、私が理解計算出来るまで先生から懇切丁寧に教えていただいた。

5年生クラス担任はギョロ目のON先生。ON先生は慶応義塾大学卒業間もない正義感に満ちあふれた熱血先生で授業の時は常に3尺程の六角棒を手にし、授業内容が解らない生徒や悪ふざけをする生徒がいると大声で怒鳴り六角棒でお尻を叩くのである。

私も時々痛い目にあっただのであるが、今の時代であれば暴力教師と父兄から抗議され社会問題化するところであるが当時は父兄も生徒も当然の如く六角棒教育を認めていたのである。但し1度Y君の父親が抗議に来て生徒の中で話題になったことがある。

5年生の秋、横須賀駅6時半集合の大山登山への遠足があった。

三崎から通学する私は集合時間に間に合うバスが無いとため、学校内の建物3階に起居していたON先生の部屋に一晩お世話になる羽目となった。

夕刻、先生の部屋に行くと横須賀市内の喫茶店に連れていかれフルーツパフェをご馳走になったのだが、常日頃、学校帰りに「買い食いするな」と指導されている先生を前に緊張する上、うるさい母の顔が浮かびパフェに口を付けることが出来なかった。「今日は遠慮するな、先生と一緒になのだから気にせず食べたまえ」との先生の言葉に、やっと口をつけたパフェは美味しさを味あうどころではなかった。

その晩、学校内に居を構えていた学院長の子息でクラスの友人T君の家に招かれ、晩御飯と食後にアイスクリームをご馳走になった。ON先生は同席していなかったので安心して脂肪たっぷりの美味しいアイスクリームを十分に味わうことが出来た。

当時のアイスクリームは平たい四角い小さな経木に入った物が普通でアイスクリンと呼ばれていた。そんな時代に米国製大型電気冷蔵庫から取り出された大きなカップ入りのアイスクリームに度肝を抜かされ、更には最新の電気蓄音機、電気掃除機があるT家のアメリカナイズされた裕福な家庭環境を珍しくもあり羨ましくも感じたのである。



横須賀学院小学校5年次、クラスの友と
2列目左から2番目が私、最後列右がON先生

●思い出すのも辛く嫌な中学校時代

6年生後半、その時のつけが中学生になって回って来るとは夢ゆめ思わず、母の眼がある時だけ勉強している振りをして普段は全く勉強をしなくなっていた。小、中、高一環教育の学校で容易に中学校に進学できると高を括っていたし母の勉強、勉強の洗礼に反抗し勉強する気持ちが萎えていたのである。

進級した中学校には市内外の小学校から入学して来た優秀な生徒が加わり、3クラス総勢120名となりクラスの雰囲気も小学校時代とは何かと変化が生じて来た。

本格的に英語、数学の授業が始まったが、英語の先生はK学院大学出身で吃音があるY先生。しかもクラス担任教師でもあった。

私は、吃音のためか神経質な性格の先生が好きになれず英語の授業が頭に入らず英語大嫌いになってしまった。この事は社会人になってから初歩的英語も分からず大変苦労する原因となり悔やんでも遅すぎたのである。

数学の先生は小学校時代の担任ON先生の厳しさに更に輪をかけたN先生。

私の勝手な思いであるが勉強が出来る生徒だけを鼻屑にし、勉強が判らない生徒を放置しているような先生の態度が(当時は僻みからそのように穿って見ていた)気にいらず、反感を抱いた私は必然的に英語に加え数学も嫌いな課目に加わったのである。しかもN先生は中間テスト、期末テストの結果を答案用紙に、親が点数確認した証拠に親の印鑑を押して貰って提出することを義務付けていた。

成績が下がる一方の私は、点数の良い答案用紙のみ母に見せ、悪い成績のものには母に内緒で印鑑を押し提出していた。

それがN先生にバレ、当然母へ通告され両者からこっぴどく叱られる始末。

私が悪いのは承知であるがN先生は私を庇ってくれる所か、母に同調し私を責めたてるばかり。ますます勉強が嫌いになって先生、学校、母に不信を強く抱く始末であった。

怒り心頭であった母は、この息子の学業成績状態では医者への道は遠ざかるとばかりに三崎在住の元英語教師のお爺さんK先生(事実、古臭い教え方で直ぐに飽きてしまった)の家へ通わされた。

数学に関しても早稲田大学理工学部在籍の学生が開いていた小さな塾に無理やり私を通わせたのである。

しかし本人は全くやる気がないから、神経質極まりない早稲田の学生の塾に2ヶ月間、通わず毎週塾の時間は映画を観て過し月謝代を殆んど使い込んでいた。

今となっては塾に来ない事を親に連絡もしない学生の無責任さに呆れてしまうが、漸く2ヶ月半後、学生から通って来ないと母に連絡があり、案の定母の逆鱗にふれ、しぶしぶ通う事になる。好きになれないアルバイト学生の指導に、付いて行けず勉強内容は全く頭に入ることは無く身に着くはずもない。

この事件以後、母との闘争確執の日々が続き何につけても母に反抗し、反抗に徹した中学時代を頑なに貫くのであった。

厳しい学校の先生、過干渉の母親との板ばさみに身を置かざるを得ず、通学のバスが崖下に転落して呉れないか、そうしたら自分は死ぬるし、どんなにか楽になれるのにと日々バスの中で夢想していた悲惨な時期である。

医者の子として生まれて来なければこんなに悩まなくて良かったのに、生んで呉れなければ良かったのにと精神的に落ちる処まで落ち病んでいたのである。

そのように母に反抗する態度の私に父は寡黙を通していたが、寡黙が故に心の隅で父に対し畏怖の重いを持ってはいたのである。

● 中学生時代の数すくない嬉しい思い出

何も楽しい事のなかった中学生時代であるが、小学生の時代から冬場になると全く街灯など無い真暗闇の畑道をバス停から恐怖のあまり走りに走って帰宅したのが良かったのか、走ることにかけてだけは学年一の早さになっていた。

そのため小学校、中学校、合同運動会のクラス対抗リレーでは毎年、クラス代表に選ばれていた。劣等生の数すくない自慢であった。

昭和33年、3年生の冬、横須賀市中心部を一周する全校マラソン大会があり優勝したことがある。

同年5月、第3回アジア競技大会が東京で開催されるに当り、聖火が全国を巡り、横須賀市にもやって来た。

その折、横須賀市内の各中学校生徒の中から聖火の伴走ランナーが選ばれる機会があり校内のマラソン大会で優勝したためか、横須賀学院中学代表としてランナーに推薦され、聖火、大会旗と共に市内を晴れがましく走ったのである。

何先生が推薦してくれたのかは不明だが、この時だけの事は中学生時代の唯一嬉しいハレの思い出として残っている。



胸に着けたアジア大会のゼッケン

4. 恩師との出会いー高校生時代

● アチーブメントテスト

昭和30年代、神奈川県では表向き「学習習熟到達度を確認する」との名目で中学

2年生の3学期にアチーブメントテスト(以下アテスト)が私学、公立の区別なく実施されていた。

このテスト(国語、英語、数学、理科、社会)の成績は、神奈川県内の公立高等学校入学判定に活用され、入学要件の最大25%(内申請と合算すると75%)と異常な程、高い比重を占めていた。

エスカレート式進学が可能な私学横須賀学院中学校に在籍し、しかも親友の少なかった私は、他の生徒が真剣にアテストの勉強をしていたことを、つゆ知らず安易な気持ちでアテストを受けた。勉強をしていない私のアテストの結果は見るまでもなく散々なもので公立高校入学など中学2年生の時から望むべくも無い状態であった。

その後、時を経てアテストは中学3年次の成績が反映されない等の物議が神奈川県教育界から出され平成9年に全廃となった。

ともあれ昭和34年4月、エスカレート方式のお陰で落ちこぼれ生徒の私は横須賀学院高等学校へ入学を許されたのである。



高校入学時の学生証

● 教師、母との確執再燃

中学校同級生の中で成績優秀な生徒は県立、有名私立高校に進学して横須賀学院を去り、全てではないが横須賀学院高等学校には県立高校入試に落ちはしたが個性豊かな生徒達が他中学校から入学し、学年の雰囲気は中学時代とがらりと変わった。

1学年のクラス担任は数学、物理を教えるTG先生。先生は細い目に黒ぶちの眼鏡をかけ、小太りで油ぎり奥様が気になさらないのかYシャツの袖口、襟首は黒く薄汚れ服装など気にしない先生であった。理詰めの正論で生徒に逃げ場を与えないような先生に大変申し訳ないことだったが私は新学期早々から又もや拒絶反応と抵抗を示し、常に反抗的態度を取り続けるためTG先生から疎まれる存在の生徒であった。

新入学時、このTG先生が引き続き3年次までクラス担任となるとは思ってもよらぬことであった。この事が分かっていたら、もう少し素直になり先生から覚えめでたい生徒で楽しい高校生活を送れたはずであるが、遅きに失してしまった。

私が学業の面で更に落ち込んだのは、言い訳がましいが中学生時代、何かと確執があり反りが合わなかったN先生が高等学校の数学の担当教員として着任した事であった。

N先生は1学年のクラス担任もされたが私のクラス担任で無かった事には胸を撫で下ろしたものである。

先生は数Ⅰ、数Ⅱを担当され私も授業を受けたが基礎が分かっていないので全く授業内容について行けない状態。

医学部受験には数学が必修であり、私の母から内々に依頼を受けていたのであろう、先生は特に私を厳しく指導され、居残り勉強を何回かさされたことがある。

それが却って数学嫌いになる要因となり先生に逆らって心を開くことを拒絶していたのである。私の事を思えばこそ心を鬼にしてN先生が情熱を傾けてくれていたのに、当時の私はN先生の気持をないがしろにして、大変失礼な態度を取ったことを、後日同窓会席上お詫び申し上げた。

N先生の発案という噂であったが、全生徒の中間、期末テストの結果順位(数学、国語、社会)氏名が試験終了後の1週間程、廊下の壁にずらりと巻き物を広げた如く貼り出されることになった。

ワープロの無い時代、課目別に百数十名の氏名、点数を成績順に手書きで書かれる先生方の作業は、ご苦労な事であったと思う。

一学期に於ける中間テスト結果は国語、社会科目は比較的上位順位であったが数学は中位以下、期末テストに至っては最下位の一つ前であった。

屈辱的成績に本人は心中穏やかであるはずはなく廊下を通るのが苦痛であったし登校するのが嫌になってしまった。

当然、この数学の成績結果は母の知るところとなり、三者面談の場で厳しく叱責されるが私は見せかけだけの反省の態度を示し、その場を取り繕うだけであった。

帰宅すると母は成績の悪さに興奮し鬼面と化し私を罵倒して猛省を促す。それに対し私はカバン、教科書、腕時計等、物を母に投げつける暴力沙汰に及び凄まじい状況で私は食事をとることを拒絶した。そしてこの険悪な状況が数日間続いたのである。

これらの事は当然父の耳にも入った筈であるが、父から叱責されることもなく安堵を覚えていた。

● 恩師と慕った野平満枝先生

私の暴力沙汰から数日後、授業前にTG先生から放課後教室に残るように言われ何事かと心中穏やか成らない状態で、その日の授業を受けた。

放課後、指示された部屋に向くと其処には何と厳しい顔をした母とTG先生、笑みを

浮べた野平先生が待ち受けていたのである。

野平先生は広島女学院出身で広島原爆の被災経験をされている敬虔なクリスチャンの先生で母の歳より少し若い方であった。

先生は家庭科を担当されており、知ってはいたが私のクラス担任ではなかったので余り話す機会がない先生であった。

「継君、今日はお母さんも、TG先生も絶対叱ることは無いと約束するから、勉強のこと、お母さん、TG先生に対して不満に思っていること包み隠さず話して御覧なさい。一人でいらいらしては苦しいばかりでしょう」と野平先生が口火を切られた。

暫く重苦しい空気が部屋を支配し誰も口を開こうとしない。

5分位して野平先生が「継君、高校生になって遠慮するなんて男らしくない、不満をぶちまけ楽になって仕舞ったら良いのよ」と言われる。

その場の様子と野平先生の真意を計りかねていた私だったが突如「無理やり医者になることを強要されたくない！小さい頃から医者になるのが当たり前のように母から勉強を強いられてきたことが重荷になって耐えられない、死にたい！干渉しないで欲しい、自由が欲しい！勉強なんか嫌いだし絶対医者になんか成れない、成りたくもない！TG先生も生徒の心の内を察する先生であって欲しいのです」泣きながら今までの心の悩み、鬱憤を思いのたけ吐き出し、分かって欲しいと絶叫する私であった。

母は泣き伏すし、TG先生は苦みばしった顔をそむけ言葉を発しない。

「お母さん！継君は本当は暴力を振るうような悪い子でない、母親思いの素直な子なんですよ。一人でお母さんの重い期待を一身に受けとめようとして来たのです。今日からは継君を楽にしてあげるよう約束して下さい。お医者様だけで社会が成り立っている訳で無いのですから彼を見守ってあげましょう、TG先生もですよ」野平先生の言葉に当初は納得いかない様子の母も今後は私に干渉しないこと、医者になることを強要しないと約束してくれたのである。

TG先生も同意してくれたが卒業するまで、しこりが残る師弟関係であった。

最後に野平先生は「これからは高校生生活を楽しもうよ、お母さんが約束を守ってくれなかったら、そして他にも何でも悩み事があれば私のところへ相談しにおいで。継君は一人じゃないのだよ一人で悩んではダメ。苦しい時、悲しい時いつでも君を見守っていてくれる人がいる事を考えなさい。見守っていてくれるのは私でも、お母さんでもなくて天におられる神様なのですよ。キリスト教主義の学校に長くいるのだから、今分からなくても、何時かきっと分かる時が来ると思うよ、継君一人だけで無いこと決して忘れないでね」と言われたのである。

この時の野平先生の言葉が心の奥に深く残り、先々私がキリスト教に関心を持つように成る、きっかけとなるのである。しかし母の過干渉はこの時に終ることはなく、社会人になってまで続き会社で私は大恥をかくことになるのである。



昭和39年野平先生と、左はW君

● 高校生活閑話

(1) マラソン大会

母の呪縛から解放され、心を新たにした1学年の夏休みに入ると炎天下の中、陸上部のランニング練習にも積極的に参加し気持ちの良い汗を流すようになった。

2年生の11月全校マラソン大会が横須賀市一騎塚から葉山御用邸までの約10kmのコースで実施された。二度にわたり皆に内緒でコースの下見を兼ね走り、3年生がいるとはいえ優勝できるとの絶対の自信を持って大会に望んだ。

レース序盤5番手位を走っていたが2kmの当たりで右足の靴紐が解け走りづらい。屈んで靴ひもを締め直している高が5秒位の間、10人位に抜かされてしまい再度走り出してもペースが元に戻らない。

それでも一人ずつ抜き去り、ゴール残り2km地点で前方100mを白バイに先導されるトップランナーの背中を見る2位まで浮上した。しかし無理をして追走して来たため、息が上がりトップと30m差まで詰めるのが精一杯、追いつくことが叶わなかった。靴紐が解けたことが悔やまれたレースであった。

優勝は3年生、野球部のKさんであった。翌年の優勝を目指し練習に励んだが交通規制の関係で警察から道路使用の許可が下りず全校マラソン大会は開催されず、捲土重来の機会は潰えてしまった。

(2) 岩下志麻に舞いあがる

とある休みの日、その後長く付き合う事となるI君、S君、W君、K君達と松竹大船撮影所見学に出掛けた。

S君の叔父さんが松竹の録音技師とかで、見学を許してくれたのである。

当時、「あの橋のたもとまで」作品で人気絶頂の美人松竹ニューフェイス岩下志麻に会うのが最大の目的であった。

岩下志麻は現役大学生の初々しい女優さんで、気さくにサインをしてくれ、写真と一緒に撮る事も許してくれ我々うぶな高校生達は舞いあがってしまったのであった。

胸を肌蹴た演技に私をドキドキさせた桑野みゆき、可愛さの残った久我美子、そして佐野周二など有名俳優に合いサインを頂戴した。



岩下志麻と左端は亡きI君、右端はS君

● 修学旅行ー父からのプレゼント

二年生に進級すると生徒は選択科目により理系、文系コースと分けられた。

多少の悶着はあったが、母も医者へさせる事は諦めていたので、私は迷うことなく文系コースを選択した。文系コースとはいえ数Ⅲが必修でない位であったが、難解な数Ⅲの授業が免除されるのが嬉しくてたまらなかった。

英語が苦手であったのは中学時代と変わらなかったが国語、日本史等の勉強には精をだすようになっていた。

昭和36年2月末。4月に実施される修学旅行の、しおり作成委員として野平先生を交えての打合せの場で「校医の先生の体調が悪くなって旅行に同行出来なくなって困っているの、何方か同行して下さるお医者さんか看護婦さんいないかしらねえ」と野平先生が医者の子の私を前にして困った様子で言われたのである。

野平先生の困り顔を見て、私は安直にも咄嗟に「父に相談して見ますよ」と言ってしまったのである。

帰宅後、母に事情を話すと父に訊いて呉れることになった。

病院長として多忙な日々を過ごし、学校に一度も来た事のない父が一週間も病院を留守にして休診するはずは絶対ないと思っていたのだが、何と予想に反し修学旅行に同

行お手伝いするとの返事が還ってきたのである。

野平先生にその旨報告すると大変喜ばれたのだが、私としては決して喜ばしい事ではなかった。

修学旅行と言えば、その機会に羽を伸ばし、あわよくば先生方の目を盗んでタバコを吸い酒盛りをしようとするのが定番。大半の男子生徒は決行を画策しているのに、私に関しては父親が同行するのであるから、何も出来ないと思ったからである。

日頃、畏怖の余り私は父と会話をする事などなかったのであるが、父は修学旅行の行先が京都、奈良に加え四国高松、琴平神宮(こんぴらさん)が含まれているのを知ると、私に琴平飴、厳しい琴平神宮の急階段などのことを懐かしく話すのである。

帝国陸軍松山連隊長の息子として松山に育ち、四国がよほど懐かしかったのか旅行を心待ちするのであった。



修学旅行のしおり

4月1日、午後8時22分大船駅から4人掛けの座席で到底寝ることなど出来ない夜行列車に乗り込み東海道を西へと下ったのである。

早朝、神戸駅に着き、船で淡路島へ渡り鳴門の渦潮を見学、高松、屋島、小豆島、琴平宮、京都、奈良と旅行を続け父の存在に特別気になる事もなく友人達と旅行を楽しむ事が出来た。

旅行中、多少怪我をしたり、熱を出した生徒がいた位で父の出番は余りなかった。

今の時代なら4泊程度で済むところを車中2泊を含む7泊8日の修学旅行を無事終え父共々帰宅したのである。

父が修学旅行に同行して呉れたのは小学4年から高校2年まで8年間の長きに亘り不肖の息子がそして何より母が横須賀学院の先生方に、大変お世話になった事へのお礼がしたかったのだとの話を後に母から聞かされた。

修学旅行同行は医者になることを拒んだ私への父からの最高のプレゼントでもあったのだ。



前列左端が父、右へ二人目が野平先生、私は最後列左から9番目
(小豆島にて)

5. 浪人生活時代

●浪人決定

昭和36年4月、留年した生徒が3名程いたが、私は3学年に進級することが出来た。3年生になるとクラス内で大学入学のことが、嫌でも話題に上がって来るようになった。男女共学で就職希望者もいたが学年の9割以上が短大を含め大学入学を目指していたのである。

具体的な希望大学名を上げる友が多い中、医者になるという呪縛を解かれた私は大学受験を他人事のように考え、何処の大学に行きたい何を学びたいという目標を持たないお気楽な生徒であった。

それでも大学に入学出来るなら大学野球の盛んな六大学(当然東大は除外)に入りたいとなあと思い始めてはいたのである。

私立横須賀学院はキリスト教精神に其づく小、中、高の一環教育を目指しているプロテスタント系の学校である。

そのため毎年、成績上位の生徒はプロテスタント系列の大学に入学できる推薦制度があった。男女比区別なく、約10名が関東学院大学、約5名が明治学院大学に推薦入学でき、青山学院大学だけは男女1名ずつだけの枠であった。

推薦される条件は2学期の期末テスト結果と学習進捗度合い、内申点が加味され高い

評価条件を満たしている生徒に推薦の学校名が内示されたのである。
毎年、国立大学等他大学に進学希望の生徒は推薦を辞退するので、おのずと推薦枠の競争率は下がると聞き私にもチャンスがあると発奮、夏休み返上で俄然受験勉強をするようになった。

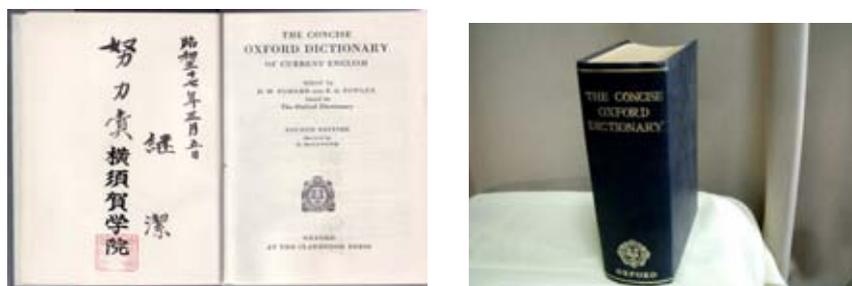
夏の暑さを避け涼しい早朝、W君と学校に出向き静かな教室で昼まで勉強に励んだ。
2学期、期末テストの結果、文系コースで上位の成績を上げ青山学院大学入学の推薦を得ることが出来た。女性の推薦者はHさんであった。
当時、横須賀学院の院長には青山学院大学元学長であった古坂嵩城先生が就任されていた事もあり面接があるとはいえHさん共々青山学院大学入学は間違いないと確信していたのである。

年が明け昭和37年1月、青山学院大学へ出向き型通りの面接を大木金次郎学長から学長室で受けた。しかし面接結果は不合格、夢は一夜にして崩れ去っていった。理由をTG先生から聞かされたはずであるがショックで全く記憶にない。
付け焼刃の勉強が大学サイドにはお見通しであったのであろう。Hさんは何ら問題なく無事、青山学院に進学が決定した。

2月、実力で入学して見せてやるとばかりに、野平先生のお嬢さんが通う立教大学の経済学部を受験したが過去の入試問題の傾向と対策さえしていなかったのが当然ながら不合格であった。受験の厳しさを嫌と言う程、思い知らされた出来事であった。

昭和37年3月5日、卒業式に臨み少年時代から始まる9年間の出来事が走馬灯の如く頭をよぎり晴れがましい式の間中、恥ずかしながら涙を止める事が出来なかった。列席していた母も涙していたことと思う。

9名の生徒が「努力賞」を得る荣誉に輝いたが、1年次の成績、素行からすれば良くここまで頑張ったとの事なのか私までも「努力賞」を頂ける事になったのである。この賞は母に対する「努力賞」でもあったと思っている。



記念品のOXFORD英英辞典

● 立教大学に目標を定める

浪人と決まった3月、代々木に校舎があり受験参考書、ラジオ受験講座などで名の知られた講師が多く在籍する代々木ゼミナール(以下代ゼミ)に手続きを済ませた。実際に先頃亡くなった「何でも見てやろう」の小田実、西尾メソッド英語の西尾、古文の樋口、現代文の塩田等そうそうたる講師陣が代ゼミにはいたのである。

代ゼミに通う直前の3月末、私同様、希望叶わず浪人生活に入ったW君、S君、職業訓練所に通うことにしたK君の4名で高校生活に区切りをつけるためにも気分転換しようとして山小屋1泊の丹沢塔ノ岳登山を決行した。

神奈川にある山の頂上ひとつさえ極められなければ、来年の大学合格という頂上は制覇でないぞとの屁理屈を作った山行きでもあった。



左から私、K君、W君(塔ノ岳山荘で)

山小屋での一晩、お互い志望大学の話をしたが、私は迷う事なく立教大学経済学部を目指すことを皆に宣言した。理由は野平先生に感化されキリスト教系の大学に進学したかったからである。

当時、キリスト教系の大学は都内にICU、上智大学、青山学院、明治学院、東京神学大学があったが、ICUは実力的に無理、上智は今と異なり偏差値が立教より低くかったがカソリック系でパス、となると先にも述べた六大学の立教大学が選択肢の一番目に残ったのである。

ミーハー的だが読売巨人軍で活躍していた憧れの長嶋選手が立教大学出身であったことも選択の一理由でもあった。

何故か慶応義塾、早稲田は眼中になかったのが不思議な位である。

一夜明けた翌朝、4月の声を目前にした季節なのに夜中に雪が降り、山々は銀世界であった。雪対策をこななかった我々は雪道に難儀を強いられた。お互い「山登りも大学受験もしっかりと事前調査準備をしておかないと大変な目に遭うことになる」と反

省しお互い来年の目標に向け準備怠りなく勉強をしようと誓ったのである。



雪の峠道を下る。前からW君、K君、私

● 代々木ゼミナール在籍時代

予備校は大学受験に失敗した連中が集まってくるので暗い雰囲気のところと想像していた。しかし代ゼミは何故か明るい雰囲気が漂っている予備校であった。東大進学コースもあったが概して六大学等の私学を目指している連中が多く女性が3割近く在籍していたせいかも知れない。

当時、東大を初めとする国立 I 期校を目指す者は駿台予備校に在籍し、入校するには立教大学に入学するより難しいと言われていた。駿台に順ずるところが新宿予備校、W君、S君が在籍していた。研数学館もどちらかと言えば私学向けの予備校で、高校時代出席番号が一つ前であったT君が勉強していた。

キリスト教主義の(*注)横須賀学院高等学校は一学年の生徒数が120名と少ないこともあり家族的雰囲気が漂い、生徒の大多数は、おっとりとしてガツガツと勉強をすることなく学生生活を楽しんでいた風がある。

そのせいか推薦を受け大学へ入学した者以外の男子生徒の大半は浪人し、お互い離れ離れの予備校に通っていた。

代ゼミはマンモス予備校で関東ばかりで無く遠く四国、近畿方面から上京して来た連中も多く在籍していた。

大部屋の階段教室もあり横須賀学院高校時代の一学年120名を、はるかに超える受講生が教室を埋めつくし、当初は度肝を抜かされたものである。

正に「井の中の蛙、大海を知らず」を身を持って実感した。

(*注)現在の横須賀学院高等学校は一学年600名を有するマンモス校に成り進学コース等が設けられ校舎も一変している。有名大学への進学者も多くスポーツ活動も盛んである。



昭和36年当時の横須賀学院校舎



現在の校舎

代ゼミでの講義内容は受験に即したもので、しかも豊富な受験対策知識を持った講師陣は、上っ面の勉強だけでなく歴史上の人物や小説家の裏話等をしてくれたり、高校の授業より数段面白かったし、雑学を学んだという点で後々の社会生活の中で役にたったのである。

横須賀からの通学は大変であったが勉強ばかりが能ではないと、講義の後、乗り物好きの(特にジェット旅客機、戦闘機が好きだった)私は気晴らしに良く羽田国際飛行場へ出掛けて行った。

送迎デッキに立ち海外から飛んで来るジェット旅客機を飽きもせず眺め、離陸する旅客機を見送りながら、未だ見ぬ遠い国に思いをはせ、何時の日かジェット旅客機に乗り外国へ行って見たいと夢想する事がたびたびであった。



現在は就航していないパンナム機

夏頃からS君達が在籍する新宿予備校や研数学館の講義に紛れ込んだり、模擬試験を受けに遠征した。

横浜にあった山手学院予備校の模擬試験も何回か受け、国語、日本史は上位にランクされたが優秀な連中は難しい東京の模擬試験を受けに行っているのだと心を引き締めたものである。

自分の実力を知るのには全国規模で実施され、現役も参加する旺文社全国模擬試験が最適であった。志望大学、志望学部を記入すれば受験者のデータから志望大学合格可能パーセントを知ることが出来たからである。

全国模擬試験は年2回実施されたと記憶しているが希望試験会場を指定することが出来、2月の本試験で雰囲気飲まれ舞い上がってしまった私は、迷うことなく立教大学会場を選んで参加した。

1回目の模試では立教大学経済学部の合格可能率は65%であったが、年末の模擬試験では85%までになって合格への自信を深めていた。

冬には「人事を尽くして天命を待つ」いつでも来いの心境にまでなっていた。

● 受験番号1984

昭和38年2月、いよいよ本番の時を迎えることになった。

第一志望校は当然、立教大学経済学部経済学科、まさかの時のために第二志望校として皇族が好きな母の薦めがあった学習院大学政経学部と決めていた。

そして昨年推薦入学を拒まれた青山学院大学経済学部を第三志望校として受験することにした。

受験番号の若い100番までの合格率が高いと言うジンクスが受講生の中にあり、朝一番で入学願書を出しに行くと言っている代ゼミの仲間がいた。

しかし私は気にする事なく余裕を持って立教大学受験の願書を提出した。

受験番号は1984番。「1(い)9(く)8(わ)4(よ)」と語呂合わせで読める、立教大学に入りに行くわよという私の気持ちと一致である。

これはゲンが良いと悦に入り、気分を良くして受験することが出来たのである。

因みに学習院大学政経学部の受験番号は114番「1(い)1(い)4(よ)」であった。学習院に入学していいよなのか、来なくていいよどちらにも解釈できた。青山学院は語呂が悪かったのか受験番号は忘れたが2000番台であった。

受験日が早かったのは学習院大学、次が立教大学であった。

何れの大学も英語、国語、日本史を選択して受験した。学習院大学の試験問題は小難しい設問が多い傾向があったが私が出来なければ、他の受験生は私以上に出来る訳がないと大様に構え試験に望んだ。

立教大学試験問題の傾向と対策に関し十分過ぎるほど、この一年間でやって来たので不安はなかった。

英語の試験で*「便りの無いのは良い便り」を入れ文章を作れという問題があったのを今でも記憶している。

*No news is good news

学習院大学政経学部合格したが特段感激はなかった。学習院の入学手続き最終日が立教大学経済学部経済学科の合格発表日であった。

池袋西口から立教大学に向かう道で発表結果を見終わった思われる連中とすれ違う。合格した連中は笑顔で入学手続き書類が入った茶封筒を小脇に大事そうに抱えているので、それとわかる。自分も封筒を持ち帰れるか心臓が高鳴るのを抑えられないまま、タッカーホール横の合格者発表掲示板に近づく、そこには間違いなく1984の番号が掲載されていた。

早速、電話で母、そして野平先生に報告。野平先生に直接お会いして報告とお礼がしたく、その足で母校職員室まで駆けつけた。

野平先生は涙を流し母以上に喜んで下さったのだが「あの英語が苦手な君が立教大学に合格できたのか」その場の雰囲気壊す嫌味を言う英語のW教師がいたが合格の嬉しさが先にたち反抗もせず無視する事が出来た。

青山学院大学も合格を果たし1年前、推薦問題で迷惑を掛けた横須賀学院の先生方に実力で合格できましたと報告したのは言うまでもない。

山登りを共にしたS君は群馬大学工学部、K君は途中から大学進学に変更、工学院大学へ入学することになった。惜しくもW君は二浪することになってしまったのは残念であったが翌年無事明治大学工学部に進学した。



大学入学間もない昭和38年5月野平先生宅にて。

6. 立教大学時代(その1)

● 教養課程授業に予想もしなかった数学教科

昭和38年4月、立教大学経済学部経済学科に入学。

立教、立教と懂れて入学、母と出席したのは間違いはないが入学式シーンの記憶がな

いのは何故か未だに不明である。

大学の授業環境は高校の授業とは全く異なるものと想像し期待もしていた。

しかし教養課程の1、2年次ではクラス分けがあり私はB組となり、担任教授がおり席順までも決められ出欠まで取られる。高校時代と余り変わらない締め付け環境にがっかりしてしまった。

B組の学生数は約60名。その内10名位の学生は立教高校出身で、さすが立教ボーイと呼ばれるに相応しい都会的センスに満ち溢れた連中で、自分の田舎臭さとの違いにショックを受けたものである。

教養課程で一番苦勞をしたのは数学の授業である。受験科目に数学は無かったし高校時代、数学が嫌いで文系コースを選択し数Ⅲさえ碌に勉強してこなかった私にとって数列、素数など理解不能チンプンカンプンの授業であった。教養課程の授業に数列など必要ないだろうと愚痴をこぼした学生は私だけでなかった。

2年次から専門教科の授業が一部始まったが「経済概論」「日本経済史」はタッカーホールで行われ数百名の学生で埋まり席取りにも苦勞し、さながら講演会を聴く感じで授業を受けている雰囲気は全くなかった。

憧れて入学した立教大学であるが、このマンモス授業や授業環境に対して幻滅を感じたが現在は如何なのであろうか。もし同様であれば断固改善要求するところである。



B組クラスの学生と昭和39年4月、後列左から2番目が私：

● 「筑豊の子供を守る会」活動－立教YMCA

(1) 「筑豊の子供を守る会」に入会

大学生活をエンジョイし先輩、後輩と多くの友を作るには部活動参加が良いと入学直後から考えていた。

高校時代の恩師である野平先生からキリスト教の感化を受けていた私は迷うことなく大

学内のキリスト教活動団体の一つである「立教大学キリスト教青年会」の部室を訪れた。

当時、***（注 1）立教大学キリスト教青年会**（以下立教Y）にはボランティア活動をする「下北キャラバン」と「筑豊の子供を守る会」が有り、その他に「思想科学の会」「聖書研究会」があった。

「下北キャラバン」は、僻地認定を受け海路でしか行けない下北半島に在る牛滝村を夏休みに訪問し現地児童との交流を図るボランティア活動。

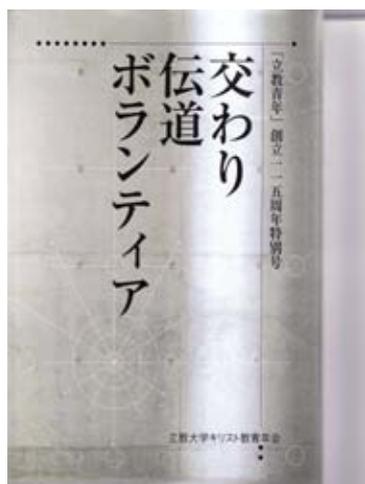
方や***（注 2）「筑豊の子供を守る会」**は、石炭から石油へとエネルギー革命が起きて九州筑豊炭坑では閉山が続出、職を失った親に見離された子供達がエネルギー革命の犠牲者となっている、その子供達の面倒を見る活動であると話を聞かされた。

ボランティア活動に優劣はないが、九州筑豊閉山炭坑で夏の炎天下の中、ボランティア活動を実践することは平々凡々と何不自由無く育ってきた私自身の反省の意味から良いことと判断し「下北キャラバン」でなく「筑豊の子供を守る会」に入会したのである。

***（注 1）立教大学キリスト教青年会**

平成11年立教大学池袋キャンパス旧11号館から発見されたタイムカプセルにより立教Yが、明治7年立教開校から遅れること18年後の明治25年に誕生した事が判明した。以後、百年を超える活動が脈々と受け継がれてきた立教大学でも古い歴史を持つキリスト教団体である。

平成18年、立教Y創設115周年を記念し部活誌「立教青年」特別号（総ページ数261ページ）が発行され私も寄稿した。



「立教青年」創立115周年特別号

***（注 2）「筑豊の子供を守る会」**

昭和35年、新安保条約締結に反対する学生達の安保反対運動がピークを迎えた。6月参議院の議決のないまま自然承認され安保条約が成立すると反対運動をした学生達に虚脱感が生まれる。

そんなまさに同じ6月、国際基督教大学、明治学院大学、東京神学大学、そして立教大学の4校の有志により「石炭産業の不況に伴う九州の筑豊炭坑困窮地帯の児童に対して、夏休みの期間に、学習指導および給食活動を実施し、併せてその地域の調査研究を行おう」という呼びかけが行われ「筑豊の子供を守る会」が発足した。その後キリスト教系大学へ呼びかけがなされ東京女子、青山学院、東洋英和、恵泉女子、同志社、西南学院の各大学が参加。活動地域、内容は異なるものの昭和42年頃まで「筑豊の子供を守る会」活動が続いた。

(2) 石井好子シャンソンの夕べ開催、募金活動

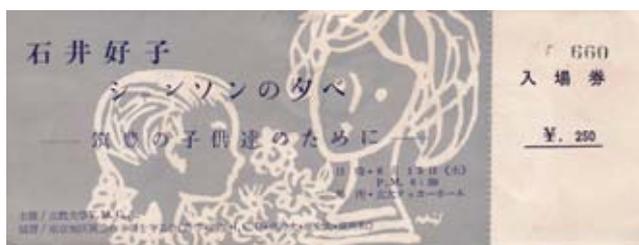
立教Y「筑豊の子供を守る会」に入会した4月、活動資金を集めるため「石井好子シャンソンの夕べ」が既に企画されており、4人の新入会員にも役割が充てられ私はチケットのデザイン担当となった。

チケットは単に文字だけで十分であったのだが、子供の雰囲気を出したく母校横須賀学院高等学校絵画教諭のI先生にデザインをお願いにあがった。

I先生は「筑豊の子供を守る会」活動、「石井好子シャンソンの夕べ」の趣旨に賛同され無償でデザインを引き受けて下さった。

6月15日(土)立教大学タッカーホールでの「石井好子シャンソンの夕べ」を迎えた。チケット代金250円に来場者数を心配したが900名近くの人々が来場、石井好子さんの歌に酔いしれ満足され盛況のうちに終演でき、関係者一同胸を撫で下ろしたのであった。

母校横須賀学院の野平先生、I先生をご招待したのは勿論である。



I先生デザインによるチケット

「石井好子シャンソンの夕べ」は無事終了したが、その収益金だけでは十数名が参加する夏季キャラバン活動の交通費、食事代、子供達の学用品購入費等には足りず、土日には池袋東口西武百貨店前で募金活動を実施した。

心ある人々から五円、十円と篤志が寄せられるなか「僕は去年まで飯塚の炭坑で働いていたとです。筑豊の子供達のために学生さん頑張って下さい」四十歳位の男性が千円札を募金箱に入れ足早に人ごみの中へ立ち去って行った。

週刊誌が定価40円の時代の千円に驚き、あの男性の善意を無にしないためにも筑豊で頑張ろうと心に誓ったのである。



定価40円の週刊朝日(昭和38年8月23日号)

(3) 筑豊閉山炭坑室木神田地区へ

1年生から3年生までの3年間、閉山炭坑*(注3)室木神田(むろきかんだ)地区で活動したが特に印象深い昭和39年の2年次の活動を中心に記して置く。

***(注3)室木神田**

昭和37年当時、国鉄鹿児島本線遠賀川から支線の室木線(現在は廃線)に乗換えた終点が福岡県鞍手郡室木町である。

この地域は明治初頭頃から石炭が採掘され昭和23年には抗口数20ヶ所に及んだが昭和32年から閉山が続き小規模抗の室木神田抗も例外で無かった。

昭和37年、旧炭坑神田地区の世帯数は約100世帯、70%の家庭が生活保護を受け準要保護家庭を含めると90%にもなっていた。室木小学校児童数は384名、昭和32年の495名から減少の一途である。

平成16年現在、旧炭坑神田地区の近くを九州自動車道、山陽新幹線が通り、ボタ山(石炭採掘に伴う捨石の集積が山となったもの、常磐炭坑ではズリ山という)も無くなりゴルフコースも2ヶ所ある。

筑豊まで出掛けるには東京駅11時発、急行「霧島」を利用。2等車(現在の普通車)の4人掛けに座ること21時間、朝方9時遠賀川着、室木に着くのは昼前の11時頃であった。

室木へ到着早々地区役員への挨拶まわりをするが、早くも大勢の子供達がゾロゾロ付きまとい丸々一日を要した長旅の疲れを休める間もなく活動が開始される。

昭和39年は前年度、活動地区の室木神田から10分離れた室木小学校を宿泊地としたため、地区の子供達から離れ彼らの懐に入った活動が十分に成されなかったとの反省から室木神田地区の空き家を借り活動拠点とした。

宿舎として借りた家は茅葺き屋根は腐り、床も腐って落ち込み斜めになっており、傾いた状態で就寝するには正直辟易した。便所は汲み取りの古いもので殺虫剤をまいても始終ブンブン蚊が飛んでいる状態であった。

宿舎の目の前には旧炭坑を象徴するかのようにボタ山が迫っていた。



活動拠点とした宿舎



宿舎からボタ山を望む

室木神田地区には、上下水道など整備されておらず、地区中央広場にある共同水場*(注4)バックに貯められた水を利用していた。水汲みは子供達の仕事である。

当然風呂も3日に一度地区長の家で借りるだけであったが女子学生だけは、この地区長の家にお世話になった。



毎朝の日課、バックへの水汲み



バックで水を飲む子供達

*(注4)バック

3m四方、高さ4m程のコンクリート作りの雨水貯水装置で、底の方から砂、砂利、石炭ガラを交互に積み重ね、雨水を濾過し生活用水として使用。

毎日、朝6時30分のラジオ体操から夜11時近くに終る反省会まで活動プログラムがびっしり組まれていた。

雨戸が壊れ戸締りが出来ない宿舎のため蚊張りをして寝ていたが朝6時前には子供達がワイワイと蚊張りをめくり我々を起しにやって来るので、おちおち朝寝坊もしてられない。

子供達は我々の三度の食事にも興味しんしん、何を食べているのかと覗きに來るので、彼等を思うと質素なものしか口に出来ない。飢えてひもじい思いをしている子供も中にはいたのである。

午前中は小学児童の勉強の面倒を見てやるのだが、母親から弟、妹を預けられている児童もおり勉強の合間、我々が手分けして赤ん坊のオシメや、幼児の面倒も見てやったりもした。午後は少人数のみの中学生の勉強に付き合い、手の空いたメンバーは地域調査のため家庭訪問に出掛けるが殆どの家が留守、在宅しているのは老人のみである。

夜は紙芝居、幻燈大会、寸劇、9時過ぎからは地区長を交え母親達(大抵の家庭は父親が北九州方面に働きに出ていて不在)と懇談会を実施し意見交換するが、東京から、しかも夏の短期間だけの学生活動に冷ややかで出席者数は少なかった。

しかし出席の母親から生活の苦勞話を聴かされ涙が出るのが、しばしばあった。



母親との懇談会

活動の中で子供達から一番喜ばれたのは室木小学校校庭で行われたキャンプファイヤーであった。近隣地区の大人、子供達が多く集まり、特にインディアンに扮した我々の踊り、そして皆で踊る盆踊りの定番「炭坑音頭」に大いに盛り上がりしてくれた。



インデアンに扮して、右が私

(4) 上野英信先生の「筑豊文庫」

現在、戦後ルポルタージュの古典と称される「追われゆく抗夫たち」(岩波新書)の著者である上野英信先生の***(注 5)「筑豊文庫」**を夕方から訪問する機会を得た。

***(注 5)「筑豊文庫」**

昭和35年頃、室木から程近い鞍手郡六反田に「筑豊文庫」は作られ、集会所、図書館、ある時は食堂、宿舎となり、駆け込み寺も兼ねたこともあり上野氏は奥様共々六反田地域の人々から先生、先生と慕われていた。

この場所で「追われゆく抗夫たち」は執筆された。



上野英信先生、昭和39年8月筑豊文庫で

先生から筑豊炭坑にまつわる話を色々お聴きしたが「これからは子供より老人を守る会を作らんと、いけんのです。筑豊では打ち捨てられた老人が多くおり今後問題化しますよ」との話。

老人問題が深刻に語られる現在であるが、45年前に上野氏は既に老人問題をお見通しであったのかと先見性に感銘を受けるのである。

美人の奥様も同席された中、先生は「焼酎を飲まねば筑豊の人間と語る資格はナカ

ヨ」と言われ、私は生まれて初めて生の焼酎をコップ2杯ご馳走になった。
その晩、男子メンバーは焼酎に酔い腰砕けの状態で宿舎に戻ったのであった。
翌朝、二日酔いで頭がガンガンと痛かったが、6時前には子供達に無理やり起され胸
苦しい状態で、その日の活動プログラムを始める始末であった。

(5) 「筑豊の子供を守る会」活動に思うこと

筑豊室木神田地区に3年間出掛け活動したが毎年5kgは痩せて帰京した。
夏休みの短い2週間程であったが、メンバー全員よく病気にもならず活動できたものだ
と、私の人生において忘れがたい貴重な体験となったのである。
しかし残念ながら室木地区の親からも地域の人々からも真に受入れて貰えなかった活
動であったのも事実である。
子供達に慈悲心を向けるのでは無く、短期間ではあっても生身の自分を子供達にさら
け出し、親の愛に飢えていた子供達を心の底から好きになり子供の目線に立って接し
てあげる事が一番大切なことだったと思うのである。
今にして思うに、社会というものを十分に知りもしない知ったかぶりの若造の学生分際
で筑豊地域の親の意識を変えてやろうとか、地域社会改革をしてやろうとか、高慢な
気持ちや理論をかざして活動した事を深く反省しているのである。



昭和39年の参加メンバー、左から2番目が私

7. 立教大学時代(その2)

● パラリンピックボランティア

昭和39年10月、第18回東京オリンピック大会が開催されるとあって東京周辺はオリン
ピック一色で盛り上がり、人々も浮かれた状況の中にあつた。

私は中学、高校と陸上競技活動をしてきたのでオリンピック競技の中でも陸上競技特にマラソンに興味を持っていた。

エチオピアのマラソン選手アベベのオリンピック2連勝の走り、そして惜しくも3位となった円谷選手の悲壮感に満ちた力走が目に焼きついている。

授業をサボり立教Yの部室で、先輩が持込んだポータブルTVで観戦したのである。

オリンピック開催中、パラリンピックのボランティア参加要請がパラリンピック大会委員会から大学にあり立教Yからも5名が応じた。

13回目を迎える大会であったが、私はパラリンピック大会(国際身体障害者スポーツ競技大会)そのものをボランティア参加要請があるまで知らないでいた。華やかな東京オリンピック大会の影に隠れ知名度が低く一般の人々からの関心は薄かったと思う。

11月4日になると11月8日の開催日を前に世界21ヶ国から選手達が羽田国際空港にやってきた。

私の担当選手はドイツからのアーチェリー選手、両足に障害があり車椅子を使用しているとの事前情報があった。

4日夕刻7時、エアフランスのチャーター便で到着したドイツの選手団をジェット旅客機の真下で出迎えた。間近にジェット旅客機を見るのは初めての経験であった。

その日の仕事はリフト付きバスに選手共々同乗し、代々木選手村の宿泊部屋までの案内介護であった。開通間もない夜の首都高速道路は、今と違い車が少なくガラガラであり30分程で代々木の選手村に到着した。

学生のため終日のボランティアは出来なかったが延べ6日間程、宿舍の部屋から選手村食堂へ、宿舍から神宮外苑のアーチェリー競技会場までの送迎介護の手伝いをさせて貰った。

片言の英語であったがドイツの選手と意思の疎通もとれ仲良くなったのだが、彼の名前、住所を書きとめたメモを無くし、名前を忘れ、連絡も取れず折角の国際交流の切っ掛けを失い残念に思っている。

選手村の食堂では我々ボランティアも飲食を許され、各国選手向けに作られた料理を口にした。選手村臨時郵便局では市中では完売になり手に入らなかった東京オリンピック記念切手シートが選手達の記念みやげとして大量に用意されており、私も購入させて貰った。

パラリンピックでのボランティア活動は世界に目を開かされた点で、「筑豊の子供を守る会」活動とは別の意味で有意義であった。

大会終了後、選手達は東京都内見学、箱根観光に向かいバラバラとなり、ドイツの選手を羽田で見送りをすることが出来なかった。



記念切手シート



ボランティア参加章



美智子妃に表彰される選手

●立教Yの楽しかった思い出

立教Yでボランティア活動にのみ明け暮れていた訳ではない。

「筑豊の子供を守る会」活動が終われば、「修養会」と称する立教Y全体の夏合宿が毎年行われ、菅平、志賀高原、草津等へと出掛けた。

毎回、立教Yの顧問である糟谷伊左久教授、速水敏彦チャプレンに参加いただき、聖書講読を中心に「神とは」「死とは」等の講話を聞き学んだ。

先生、学生の区別なく夜遅くまで聖書、哲学等に関し、かんかんがくがく討論を交わし、日頃の授業よりもアカデミックな雰囲気味わったものである。



昭和39年8月「修養会」志賀高原熊の湯

前列左から3番目が速水チャプレン、4番目が糟谷教授、私は3列目右端

秋にはセントポール・フェスティバル(立教祭)が開催され、立教Yはパネルにより「筑豊の子供を守る会」「下北キャラバン」活動の報告、啓蒙を行った。

昭和39年のフェスティバルでは翌年の活動資金を得るため、学内数ヶ所で靴磨きをしたり、仮装大会に出場して堂々1位となりビール1ケースの賞品を獲得した。
更に私が立教Yに入会した昭和38年から前期テスト終了後の10月、男子部員の有志で山手線の外周を徹夜で歩くことが恒例の行事となった。
東京オリンピック開催の年などは、立教Yの旗を手に歩いていると、警官から何かの無届デモ行進かと間違われ数回呼止められ誰何されたりした。
ベトナム戦争が泥沼化する時代であったが、学生時代の楽しい思い出の一コマである。



仮装大会で1位の賞品ビールを真中に
私は後列左から4番目(昭和39年11月)



山手線徒歩一周、渋谷ハチ公前(昭和39年10月)
私は後列右から3人目

● ミス立教との出会い

昭和40年当時、立教大学経済学部ではゼミナール(以下ゼミ)は必修科目ではなかった。学生数に対し指導教授の人数が足らなかったのだと思う。

よってゼミの数も少なく、ゼミ入りを希望する学生に対し何れのゼミも選抜のためレポート提出、面接を課していた。

3学年次になると「筑豊の子供を守る会」に参加していた私は日本の炭坑の盛衰が日本近代経済史と深い関係にあると思い、日本近代経済史を学べるゼミに入り勉強したいと思っていた。

ゼミ案内により、立入広太郎教授が指導する「立入ゼミ」が主に近代日本経済史を研究している学生が多く在籍していることを知り、筑豊閉山問題を日本財閥会社との関係で論じたレポートを提出し「立入ゼミ」で勉強することを許されたのである。

ところで大学入学当初から立教Yやクラスの仲間から、毎年ミス立教なるマドンナが各学年の全女子学生の中から選ばれていることを聞いていた。

ミス立教の選考基準や誰が審査にあたっているのかは不明であった。

昭和39年秋、我々2学年次のミス立教は、なんと私と同じ経済学部のAという女子学生である事を知った。

彼女には慶応大学大学院生の彼氏がいて毎日授業が終わる頃、外車で迎えにくるといふ噂があった。

秋口、あれがミス立教だと教えられ遠目に見た事は数度あった。

確かに聡明そうな美形だが、お近付きになる機会も無いだろうし、きっと鼻持ちならない女子学生なのだろうと思うだけの存在であった。

昭和40年4月末「立入ゼミ」開講当日、教室に入って行くとゼミ生の中に、男子学生に混じって何とあのミス立教のAさんが笑顔で座っていたのである。

自己紹介で私と同じく4月より新ゼミ生になったとのこと。

その後ゼミ生の仲間として付き合い合っていくと、Aさんはミス立教と言われることなど全く鼻にかけるような人でなく、賢く優しい思いやりのある女子学生であった。

噂通りゼミ終了後やゼミ旅行の時など彼氏が外車で迎えに来たのは間違いなかった。

その様に隠し立てしないところが、ゼミ仲間からも好かれていた要因でもあった。人間、直に会って話しをしてみないと本当の性格など判らないものだと痛感したのである。

「立入ゼミ」では日本財閥の誕生から第二次大戦後の解体、そして再編の過程を研究し、立教祭でも発表した。

当時、マルクス経済学一辺倒の立教経済学部であったが「立入ゼミ」は、私にとってマルクス経済学から離れられる一服の良薬的存在であった。



昭和40年「立入ゼミ」ゼミ旅行

左端が立入教授、前列6人目がAさん、Aさんの右後ろが私

8. 4ヶ月で転職—社会人1年生時代

● 希望した銀行に就職できず

昭和41年が明け、4年生次を間近にすると就職先を深刻に考えるようになった。財閥系企業から搾取され、社会からも疎外され筑豊の片隅で底辺の生活をしている人々がいることを「筑豊の子供を守る会」活動で学んだにも関わらず、大手財閥系銀行に就職したいと尊大な気持ちを持っていたのである。

学内推薦を受けF銀行、S銀行に挑戦したが採用はされなかった。

面接で「筑豊の子供を守る会」活動を誇らしげに語ったのが左翼系学生と見られ落とされたのかと後悔したが、要は銀行マンに見合う実力がなかったのである。

無為な夏休みを過し、焦りを感じていた9月、学内掲示板に札幌トヨタ自動車の営業部員募集を見つけ、自分は札幌生まれであるし、これは神の啓示であると勝手に決めつけ東京試験会場で試験を受け運良く採用通知を受け取った。

● 札幌トヨタ自動車での4ヶ月

昭和42年3月31日、生まれて初めて搭乗するジェット旅客機で苦しい販売活動が待っている事などつゆ知らず意気揚々と札幌に飛び立った。

北海道出身者であっても札幌市内に自宅のない新入社員15名は4月の教育訓練期間中、北海道大学正門前にある「えびす屋旅館」で起居を共にした。

新入社員は60名程いたが北海道外からの者は私一人であった。

一か月に及ぶ教育訓練を終了すると配属先が決まり、私は札幌本社販売2課の辞令

を受け安心したが競走馬しかいないと言われた日高郡静内出張所の辞令を受けたU君は翌日から入社して来なかった。

当時の自動車販売会社は封建的で販売成績の上がない営業マンは、屑同然に扱われるので退社する者が多く、それを見越して販売部門の社員を水増して多く採用していたのである。



日航、B727機で札幌へ（昭和42年3月31日）

与えられた販売担当地域は札幌市の北部、北35条から北の麻生（あさぶ）までの一角、担当地域は広大でも住宅は少なく酪農家の営む牧場が点在しているような地域であった。

当時100万円のクラウンを販売するのが営業マンとしての勲章であったが、私の初任給26,800円。当時のクラウン購入者は開業医、大会社の社長、その筋の親分さんと大抵決まっていた。

私の担当地域にそのような見込客は皆無であり2ヶ月間、全く販売実績を上げることが出来ずにいた。

6月中旬の昼休み時間、社内にいると偶然「日産ダットサントラックからコロナバンに買い替えたいので営業マンを寄越してくれ」との電話を受けた。

担当地域外であっても1台販売すれば0.5台として販売実績が認められる内規があった。残りの0.5台は販売活動をしなくても地域担当者の実績である。

0.5台でも良いと思い地域担当者には内緒で、電話を受けたその足で白石（シロイシ）にある鉄工所の社長を訪れた。下取り車を査定したところ査定価格はつかず処分費用を頂戴すべきボロボロのダットサントラックであった。

しかし早く販売成績を挙げたいと焦っていた私は上司の許可を得ずに下取り価格を3万円にすること、新車コロナバンを破格の値引き価格で販売する旨、約束をしてしまったのである。

会社に戻り課長に最終決済を得るべく報告すると、他人の担当地域で上司の決裁を得ず下取り価格を決め、しかも破格の値引きをするとは言語道断、すぐ約束を取り消してこいと烈火の如く叱責を受けるはめとなった。

立場をなくし、おろおろしていると、課長の叱責を近くで聞いていた販売部長が「お前の提示条件で良いから、必ず契約書に印鑑を押して貰ってこい！くよくよせず早くお客さんの所へ行ってこい」と助け船を出してくれたのである。私は鉄工所に取り返し、何とか契約書類に印鑑を押して貰い成約したのである。部長は普段、鬼軍曹そのもの厳しく怖い人であったが、新人に自信を付けさせようと、私を庇って呉れたのである。Fさんという販売部長であった。



札幌トヨタ本社前(昭和42年6月)

6月末、先輩が販売した車の陸運局登録書類手続きを頼まれた事があった。

手続きを済ませ書類を手に会社に戻ると先輩は不在で、アシスタントの女性によると書類は下宿に持って来るよう言われていますとのこと。

アパートのドアを開けると、そこにはビールを飲みマージャンに興じる4人の下着姿の先輩達がいたのである。

彼等は月半ばまでに販売台数ノルマをこなし毎月表彰されている優秀な営業マンであった。

しかし幾ら優秀な成績をあげている先輩達とは言え、新人に仕事を任せ、昼間からビールを飲みマージャンに興じていることに、私は彼等を不誠実な人間であるとして断じて許すことが出来なかった。

販売活動に疲れノイローゼ気味であった私は彼等のような先輩がまかり通っている会社に自分が在社してことが虚しくなり、ふと辞めてやるとの思いが湧き上がってきたのである。

こんな折、独身寮で新聞を読んでいると住友スリーエムの企業広告の片隅に中途

採用者募集の文字があるのを目にしたのである。

札幌トヨタを辞めようかと悩んでいた私は住友スリーエムに応募しようと、その場で決断したのである。

応募書類を送付したところ、面接許諾の知らせを受けた。採用されるとは決定した訳でもないのに、しかも怖気付いていた私は上司に直接辞表を提出することなく非常識にも同期の仲間に辞表を託し逃げるようにして札幌を後にしたのである。

札幌を離れる朝、函館行列車が停車する札幌駅のホームに、同期のN、M両君が駆けつけて来るのを車窓から目にした。

私は4ヶ月足らずで退社する事の恥ずかしさと己の非常識さに、世話になった彼等に合わせる顔がなく、列車が動き出すまで便所の影に隠れ、彼等を遠目に見ることしか出来なかった。札幌トヨタそして彼等には大変申し訳ない事をしてしまった。

8年後にN君に再会し、札幌トヨタ共々お世話になるとは夢にも思っていなかった。

● 住友スリーエムに転職ー最初の提出書類

昭和42年9月住友スリーエムに入社、磁気製品営業部に配属となった。

入社後1週間目の会議で、上着のサイズ、袖丈、ズボンの胴回り、股下の寸法を明日まで提出するようとの指示があった。

私が入社する前から、10月上旬に磁気製品営業部の主要取引先を招待してのゴルフ大会が計画されており、部員は揃いのブレザー、ネクタイ、ズボンを着用し裏方の仕事をするようになっていたのだ。

大会当日、私はスコアカードの回収係りを任され、紺のブレザー、グレーのズボン、赤いタータンチェックのネクタイ姿でゴルフの知識も持ち合わせないのに凛々しく立ち働いたのである。

ブルックス・ブラザー製のブレザー、ズボン、ネクタイは大会後、部員に支給され後々まで愛用したが、さすが外資系の会社は違う、良い会社に入社出来たことに感謝したのである。しかし他の営業部の社員からは磁気製品の奴だけ良い思いをしやがってと、事あるごとに言われたのには辟易したものであった。



ゴルフ大会ワッペン

●録音テープ取扱店開拓

米国3M(Minesota Mining Manufacturing の頭文字から3Mと略称)は昭和30年頃からスコッチ(Scotch)ブランド録音テープの日本市場参入を目論んでいたが、日本の録音テープ製造会社は潰されると、東京通信工業(SONY)、東京電気化学工業(TDK)が3M日本進出に猛反対していた。

そこで、政府の仲介もあり住友財閥系企業の日本電気(25%)、住友電工(25%)に出資を仰ぎ、3M(50%)との合弁企業、住友スリーエム株式会社が昭和36年設立されたのである。

昭和38年には相模原市に磁気テープ製造工場を完成させ、録音テープ、コンピューターテープの国産化を開始した。

録音テープはNHKを初めとする民放各局、レコード会社に、コンピューターテープは相手先ブランド(OEM)により、IBM、日本電気、東芝、日立等に販売していた。

昭和42年頃、磁気テープは装置産業であるが故、製造機械の稼働率を上げることが重要課題で、販売量の拡大が見込まれる一般市場への参入が急務となっていたのであった。

そのような状況にあった昭和42年9月、磁気製品販売部に私は中途入社したのである。

私は神奈川県下の録音テープの市場調査と販売店開拓を命ぜられた。

当時、録音テープを扱っていたのは街の電気販売店であったが、全ての販売店は松下、東芝、日立、三菱、三洋等、大手家電メーカーの系列傘下にあった。メーカーからの締め付けがあり、販売店のメーカーへの忠誠心は絶大で、他社製品は販売したくとも、販売店は絶対に仕入れる事がなかった。

故に録音テープ市場はあるのだが家電系列外の会社であるスコッチ録音テープが入り込む隙は全くと言って良い程なかったのである。

そこで私はメーカー色の無いレコード販売店に目を付けたのである。

コロムビア、ビクター、テイチク等レコードメーカーはあるが、家電のように系列化はされておらず、レコード店は流行りのレコードであれば基本的にメーカーの差別なく仕入れ販売していた。

私にとって好都合だったのは、当時、歌や演奏の吹込み録音には一部の例外を除き高品質のスコッチ録音テープが使用されていて、レコード店主の大半がその事実を承知していた事である。

電話帳で横浜、川崎、横須賀と神奈川県内レコード店をリストアップして2ヶ月で神奈川県下のレコード店を殆んど巡回訪問した。

コロムビアの録音テープを扱う店が多少あったが、レコード店主は品質の良いスコッチ録音テープを仕入れたくても仕入れルートを知らない状況であった。

巡回と並行して、カラオケ用テープとして普及して来た***(注6)8トラ音楽テープ**をレコード店に卸販売をしており、少なからずスコッチ録音テープの扱いがあった(株)日本テープと交渉し神奈川県下の販売店を回り商品を受注してくるので更なる拡販をして欲しい旨お願いした。

これで小規模ながら販売卸ルートが確保でき、いよいよ拡販体制に入った。

***(注6)8トラ音楽テープ**

2トラック(右、左の音声)のステレオチャンネルが4つあり8トラックの音声信号が入っているカラオケ装置で使用する音楽再生音楽テープ。

当時、高級乗用車に搭載されたが数年後カセットテープに置き換わった。

当時、録音テープは5インチのオープンリール方式が主流でSONY録音機の普及と共に、録音テープ需要が増加、スコッチ録音テープ取扱い販売店数も徐々にではあるが増えていた最中でもあった。

SONYは独自にSONYショップを全国展開し家電メーカー系列店と差別化を図っている最中であった。

私の忘れられない初受注は横浜伊勢佐木町にあった野澤屋デパートのレコード売り場であった。担当のI係長は市場調査に訪れた頃から好意的でスコッチオープンテープを50本仕入れて呉れたのである。10月11日の事である。

野澤屋はその後、松坂屋傘下に入りその松坂屋も現在伊勢佐木町にはない。

9. 大阪勤務時代(昭和44年～昭和46年)

● 車で銭湯通い

昭和44年2月、大阪支店に転勤となった。

関東の人間が部屋を借りるなら大阪市内より神戸方面が良いと言われ西宮市を重点的に探しまわった。

2階の角部屋で変形の6畳半、1畳ほどの台所、トイレ付き、風呂は無いが、1階にお好み焼屋があるし、部屋からは神戸女学院の校舎が見え、歩いて4、5分の場所には関西学院がある文教地区、銭湯も近くにあり申し分のない環境である。

会社までは西宮北口経由、梅田乗換で小一時間である。そこで西宮市上ヶ原の高台に立地する、この部屋を借りることにした。

上ヶ原から大阪市内の堺筋本町にある大阪支店への通勤にも慣れてきた4月初旬のことである。夜9時過ぎ、近所の銭湯に行くと、湯船の湯量が何時もより極端に少な

くしかもお湯が何となく茶色に濁っている。居合わせた人に聞くと関西学院大学の運動部の連中が入浴して帰っていったところだと言う。

番台の親父に文句をつけると、学生さんには綺麗に湯を使うよう話すのだが、たまにこんな事もあるので勘弁して欲しいと言う始末。

要は私が引越して来た2月下旬から4月初旬まで大学は春休みで、学生は帰郷しており銭湯を余り利用していなかったのである。

これは堪らないと翌日から阪神電鉄西宮駅近くの銭湯に行くことにしたのである。

上ヶ原から車で10分かかる銭湯に鞍替え出来たのは、自動車免許を所有し住まいの近くに駐車場が確保できる営業部員には、前年の昭和43年夏からトヨタカローラセダンが営業車として貸与され持ち帰りが可能であったからである。

4月になり転居先の大家さんの庭を駐車場として借りることができたのは運が良かった。



トヨタカローラで営業(昭和44年)

● カセットテープ回収騒動

昭和44年、家電流通業界は変革の渦中にあった。大型スーパー、大型家電量販店が台頭してきたのである。

昭和39年、成長著しいスーパーダイエーが松下電器の家電製品を値引き販売したことに、松下電器側は系列傘下販売店を保護するという名目でダイエーに商品を供給しない愚挙に出た。世に言われる「ダイエー・松下戦争」である。(平成6年全面和解まで30年を要した)

「ダイエー・松下戦争」勃発前の昭和38年、資本力のある全国12社の大型家電店がメーカーに拘束されない経営を目指し、後に*(注7)NEBAへと発展する「全日本電気大型経営研究会」を創設しメーカーに対抗する勢力となりつつあった。

*（注7）NEBA

日本電気大型店協会（**NIHON ELECTRIC BIGSTORE ASSOCIATION**）

昭和47年全国79社の家電販売店で設立。最盛期の昭和50年には93社が参加、平成20年には加盟会社の合計売上高は2兆8,500億円まで達した。通常大手12社がNEBA店と言われていた。

しかし NEBA に加盟しないヤマダ電機、コジマ、ヨドバシカメラが台頭し家電業界をリードしたことにより業績悪化をたどる加盟店が増加、平成17年に解散した。

一方、NEBA に加盟できない地方都市の中小家電店は、共同仕入れ、物流の共同運用を行うボランティア・チェーンを組織しメーカーに対し発言力を持つことで仕入れ単価の引き下げを目論んでいた。

ここに至って家電流通の主導権がメーカー側から販売店側に移行したのである。

ボランティア・チェーンの一つに四国高松市に本部を置く四日電（ヨンニチデン）チェーンがあった。

昭和44年夏、事務局長からカセットテープ共同仕入れの商談依頼を受けた。スコッチ録音テープの伝統、高品質信頼性を売込み、競合メーカーの **TDK**、**SONY**、**MAXELL** を退け商談受注に成功したのである。

四日電チェーンの加盟店は20店舗で各販売店に、60分テープ100巻、90分テープ50巻、計3,000巻。住友スリーエムとの直取引で約100万円が納品される事になった。

受注の喜びが覚めやらぬ10日後、事務局長から「客から録音出来ないと言うクレームがある、調査して欲しい」との電話があり、高松に飛び問題のテープ数本を受け取り、磁気製品技術部へ検査依頼を出した。

検査結果、カセットテープは本来、録音される磁性面を表側にして巻かれるのに、巻取り工程での単純ミスで逆の裏面が表側になり巻かれていたのが判明。

裏巻きでは録音出来ないのは当たり前であった。

事業部長、製造部長まで高松に来てもらい、お詫びと原因を説明、全数良品と交換することで許して貰ったが四日電チェーン内でのスコッチカセットテープの信頼は失墜、追加注文が来ることは無く、共同仕入れ商品は **SONY** に変わったのである。

当時、米国スリーエムはカセットテープを単なる玩具的商品と考え次世代録音テープまでの繋ぎ的商品と位置付け、技術開発に余力を入れずスリーエム独自のフォーマットを開発していた。このことがビデオテープ出現まで尾を引きスコッチカセットテープは冬の時代に入るのである。



昭和45年当時のScotchカセットテープ

● 初めての海外旅行

昭和45年5月の大型連休を利用し生まれて初めての海外旅行に出かけた。

ここで過干渉の母が再登場する。この時点では私は何も知らないのであるが、上司の許可を得、6日間の有給休暇取得していたのだが母は息子が無断で長期休暇を取ったと早トチリして何と本社人事部長宛てに休暇を取った息子を許して欲しい穏便な処置をと手紙を認めていたのである。余計なお節介も甚だしい。

この件を後に札幌勤務時代、当の人事部長からあの時は人事部内で話題になった聞き驚愕と共に子離れ出来ない母に対する憎悪が湧いたのを忘れられない。

その件はさて置き、社内には既にグアム旅行をした者は数人がいたが、私は海外旅行するなら遠いヨーロッパを訪れたいと考えていた。

イギリス(ロンドン)、フランス(パリ、ディジョン)、スイス(ジュネーブ)、イタリア(ミラノ、フィレンツェ、ローマ)、トルコ(イスタンブール)、ギリシャ(アテネ、クレタ島)を13日で巡る羽田発着の強行軍の旅行であった。

20歳台の若者が6人(内女性2人)、定年退職後の夫婦7組、計20人の旅行参加者であった。

旅行中、若者と高齢者とは必然と好みや行動が異なり、若者連中は毎晩つるんで飲みに出歩き、フィレンツェからローマへは本来バス移動であったのだが、ご老人達と別れローマテルミナ駅までの列車の旅を若者達だけで楽しんだりした。

毎晩の不摂生が祟り、熱を出しアテネでは終日ホテルで寝込み、肝心のアテネ市内観光を逃してしまう事もあった。

復路はバイルート、テヘラン、ニューデリー、バンコク、香港と南回りで帰国した。

紺碧のエーゲ海、クレタ島、スイスのモンブラン、イスタンブールの巨大モスクは記憶に鮮明だが一都市長期滞在型の海外旅行がまだ流行らない時代で、主要都市の美味しいところ取りで、数だけこなす駆け足旅行に疲れだけが残り余り感慨のない初海外旅行であった。



ロンドン塔で



フィレンツェからテルミナ駅までの切符

● 大阪万国博覧会

昭和45年、大阪の街には「こんにちは、こんにちは世界の国から♪・・・1970年のこんにちはあ♪」三波春夫の万博音頭の曲が溢れ返っていた。

3月14日から大阪千里丘陵を会場に日本万国博覧会(通称:大阪万博)が開催され日本全国から見学の人々が会場に押し寄せ、大阪市内も賑わっていた。

参加国、参加企業のパビリオンでは大型映像画面、音響効果を凝らした演出によるイベントが催されていたが、それらイベントには業務用ビデオテープ、録音テープが多く使用され、住友スリーエムは万博特需の恩恵を受けた。

大阪万博が開催されていた5月の連休にヨーロッパ旅行をした私は、懐かしさからイギリス、フランス、イタリア等のパビリオンを訪れた。

しかし、アポロ11号が持ち帰った「月の石」を展示したアメリカ館、「宇宙船」を展示したソビエト館のパビリオンは人気が高く、長蛇の行列が続き3時間待ちは当たりで入館することは困難であった。

そこで前年、住友スリーエムを辞めチェコスロバキア館のコンパニオンをしていたKさんに、何とかソビエト館だけでも特別に入館で出来ないか春先からお願いをしていた。

6月になって、同じ共産圏のパビリオンと言うこともあり、Kさんの計らいで、VIPゲートからソビエト館に入館させて貰うことが出来た。

待ちに待ったソビエト館に入館し「宇宙船」を人の流れに押され見ることが出来たのだが、「宇宙船」の形、大きさ等、余り記憶に無いのである。

夏休みに入ると上司である事業部長から「家族で万博見学したいのだが何処か宿舎を探してくれないか」と依頼があったが、夏休み期間の宿泊は何処の宿も満杯で困難であった。そこで立教Yの2年後輩であるS君が中津の東洋ホテルに勤務していたので、無理を承知で相談すると予備ベッドを入れられるツインルーム1部屋なら用意しますとの返事を貰った。

S君の話では、何処のホテルでも万博の期間中VIP向けに3部屋を必ず押さえているという事であった。

事業部長に対し最大の点数稼ぎが出来たのは勿論の事である。

万博期間中、他事業部の事部長もS君のお世話になり万博終了後、住友スリーエムは東洋ホテルを出張者の宿泊指定ホテルとし、S君の便宜に少なからずお返しする事が出来た。

私の西宮上ヶ原の部屋には万博見学の目的で、高校時代の友人S君や東京支店の同僚が泊まり、更には私の父母までが泊まりに来たのである。

彼等を案内するなど都合11回万博会場を訪れた。

日本中を狂騒の渦に落とし入れた「人類の進歩と調和」をテーマにした大阪万博は「人類の辛抱と長蛇」の博覧会と揶揄されもしたが9月13日閉会式を迎え、その後、大阪は祭りの後の静けさを徐々に取り戻して行ったのである。



万国博覧会、会場

10. 出会いから結婚(昭和46年～昭和50年)

●ホンダ、クーペ7は欠陥車だった

昭和46年3月東京勤務となった。

東京に転勤してくる2ヶ月前、実家は横須賀市大津から、新興住宅地である横須賀市粟田に建売住宅を購入し転居していた。

転勤移動当日まで実家に帰宅したことが無く、他人の家を訪問するような按配であった。

ここで生死に関わる経験をしたホンダ車のことを書いておきたい。

転勤後早々、精悍なデザイン、ジェット機のcockpitを思わせる運転席周りが気に入り真赤な塗装のホンダ、クーペ7を購入した。

空冷1300cc、95馬力エンジンを搭載しリミッターもなく時速180kmを出すことが出来た車であった。

5月の連休に、横須賀学院高校時代の友人であるS君、W君、K君、私の4人で岳温泉、平泉、八幡平、奥入瀬、三陸海岸を巡る東北一周自動車旅行に出かけた。

奥入瀬から八戸市街へ向かう下り坂で、減速しようとクラッチを踏みギアを2速に落そうとするがギアが入らずエンジンブレーキが全く効かない。

スピードが増して来る中、ブレーキを踏み込み、手動ブレーキまで使用し路肩に突っ込んで辛うじて停車、山中の下り坂であったら大参事となるところで肝を冷やした。

エンジンルームを覗くとクラッチBOXを止めているボルト4本の内、1本が外れ飛びクラッチBOXが半開き状態でクラッチ操作不能になりギアが入らなかったのである。

八戸で応急修理をしたが車の調子が悪く、不快な旅を続けることになった。

後にホンダの技術史が書かれた本に、ホンダクーペは画期的空冷4気筒エンジンであったがクラッチに関してはオートバイのクラッチ技術を応用したもので問題がかなりあったとの記事を見つけ唖然とした。とんでもない話である。

以来2度とホンダの車は購入しないことにしている。

購入後5ヶ月で下取りに出し日産ブルーバード U に乗り替えてしまった。



八幡平で、問題のホンダクーペ7(昭和46年5月)

仕事面では、スコッチカセットテープは市場で相変わらず評判が悪く販売が低迷していた。

明るい兆しとしては、住友スリーエムの親会社の一つである日本電気の子会社、新日本電気と販売契約が出来、少なからず家電ルートへの販売基盤ができたことである。

新日本電気はNECブランドの家電商品を製造販売していたが、商品力、ブランド力も

弱く、系列販売店も組織化されておらず、大手ナショナル、東芝、日立、三洋等の系列販売店に細々とテレビ、洗濯機を卸す程度であり、営業マンもスコッチカセットテープの販売に力を入れるどころでなく、スコッチカセットテープが花開くのは当分先の事になる。

● 出会い、そして結婚

昭和47年5月の連休を前に、上司のS部長から、私の同僚M君と一緒に、家に遊びに来いとお誘いを受けた。

5月5日、日吉のS部長のマンションを訪ねると、一人の女性が先客として来ているのに居合わせた。

板尾(いたお)と名乗る女性で、彼女のお兄さんはS部長と立教大学時代の同級生とのことであった。

S部長の奥様(「こちら現場のSNです」で有名なレポーターのSNさん)の手料理をいただき、たわいもない話をして夕刻には板尾さんを特別意識することもなく、帰宅したのである。

連休明け入社するとS部長から「この前の女性をどう思う、特定の彼女がいないなら板尾さんと付き合え」一方的な話しである。

「素直な明るい女性とは思いましたが・・・急に付き合えと言われても」と戸惑う私に「言い訳は良いから彼女と付き合ってやれ、否なら会社は首だ！この番号に電話してやれ」追い討ちの脅迫を仕掛けてくるのである。

日吉の件は後から聞いた話によると、家内が中学生の頃に父親が亡くなり、父親代わりをしていた兄が大学時代の友人であるS部長に「妹に見合う良い奴はいないか」と相談を持ちかけた上の、仕組まれた見合いの場であったのである。

当て馬にされたM君にとっては、いい迷惑であったことであろう。

S部長の脅迫に、しぶしぶ電話を掛けホテルニュージャパン(昭和57年、大火で33人の死者を出し閉鎖)のロビーで会う約束をした。

これが家内となる板尾禮子(いたおひろこ)との出会いの顛末である。

数回のデートの後、母親と兄に会って欲しいと言われ、麴町にある禮子の家を訪問、座敷に座っていると母親と兄だけでなく、兄嫁、姉、姉の連れ合い、姉の子供達まで、ぞろぞろ座敷に入って来て、身内になるかもしれない私の品定め首実験状態には辟易したのであった。

何かと干渉する私の母も上司の紹介という事と、禮子の明るさに付き合う事に口出しすることはなかった。

紆余曲折は少なからずあったものの、トントン拍子で9月には結納を終え、出会いから5ヶ月半の10月27日に結婚式を迎えることになったのである。



結納の日、左から父、私、母、禮子の母、禮子、禮子の兄
(横浜磯子プリンスにて)

結婚式、披露宴は目黒の白金迎賓館で催した。

結婚式は立教大学YMCA顧問であった速水チャプレンに司式をお願いした。

司会は当初依頼した友人が病気となり急遽立教大学YMCAで1年後輩のW君(現、立教大学文学部名誉教授)に無理を押してお願いし、名司会振りを発揮して貰った。

様々な方から祝辞や色紙に祝いの言葉を書いて貰ったが、速水チャプレンからの「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す」(新約聖書ローマ人への手紙第5章3節～4節)が、一番印象に残り、その後の人生で困難な状況にぶつかる度に、この聖句を思い起こし、困難の先には、きっと希望があるから頑張ろうと耐えることが出来たのである。



左は司会のM君(披露宴で)

新婚旅行は車で長野県扉温泉、蓼科、そして清里の清泉寮を巡った。

「恋愛結婚ですか、見合い結婚ですか」と聞かれると結婚当初も今でも「会社上司の脅

迫結婚です」と禮子には内緒で返答する私なのである。



清泉寮をバックに(新婚旅行)

● 出生届、死亡届手続を同時に提出

新婚生活を杉並区高井戸の「人力(じんりき)荘」という珍しい名のアパートでスタートさせた。

昭和48年7月下旬、出産予定日を控え手伝いのため禮子の母がアパートに泊まりに来ていた。

7月25日朝から不定期的ながら陣痛が始まり井の頭線富士見ヶ丘駅近くのA産婦人科医院に入院、26日夕刻から禮子が背中中の痛みを訴えるのを義母と交代で背中をさすりながら出産の時を待った。

10時40分過ぎ分娩室に入った禮子は11時10分、第一子を無事出産、医者から3100gの元気な女の赤ん坊であることを告げられた。

翌27日の朝方、禮子の枕元に赤ん坊を迎え、親子共々、第一子の誕生を祝い幸福の喜びに包まれたのであった。

私の両親も28日に初孫を見にやってくるようになった。

明けて28日、早朝4時過ぎ突然の電話のベルに、たたき起こされた。

A産婦人科から「赤ちゃんの容態が急変し危篤の状態なのですぐ来て欲しい」との連絡であった。

病院に駆けつけて間も無い午前5時10分、我が子は私達に笑顔を見せてくれないまま息を引き取ってしまった。

この世に生を受けてから、わずか30時間余の命であった。

出産まで母子とも問題ないとA医師から診断され、元気に生まれてきたのに、全く信じがたいことであった。

産後の疲れのある禮子にショックを与えるのは良くないと、死をすぐ知らせなかったのだが、「どうして私の赤ちゃんを枕元に連れてきてくれないの」と何回も懇願され、辛

い思いで死を伝えたが禮子は狂乱状態に陥ってしまった。
片や28日初孫誕生を祝いに来る予定をしていた母は孫の死を聞き寝込んでしまった。
初孫の誕生を楽しみにしていた私の父母は、命ある初孫を抱くことが叶はなかったのである。
内科の医者である父は診療経過からして孫の死は納得いかないとA医師に電話を掛け説明を求めたが、A医師は外見からは詳しい死因は判らない、治療には最善の努力をしたと回答するのみであった。
そこで父は、赤子を傷つけるのは忍びないが死因を確認するためにも病理解剖に付する事を私に勧めたのであった。

夏の陽射しが照りつける28日午後、白い産着を着せた我が子を胸に抱きしめ、A医師の出身である信濃町のK大学付属病院に向かったが、私は夏の暑さを全く感じる事はなかった。

29日の朝、禮子の兄と私は小さな棺に入れられた我が子と共に、蟬の鳴き声かまびすしい中、静まり返った高井戸のアパートの部屋に戻った。
A医師からは何かと面倒だから水子として処置されたらと薦められたが、禮子が、どんな思いで10ヶ月間、お腹の中に我が子を愛おしみ育てて来たかを考えるとA医師の薦めは医師の資格なしと許すことが出来ず受け入れる事はできなかった。
幾ら短くても、この世に生を受けた一人の人間として我が子を認知したく私は出生届を出すことに決めたのである。

茶毘に付すためには死亡届けが必要であり、私は杉並区高井戸出張所に行き、氏名欄に禮子と考えていた長女、美佳子(美しく、よい子であるように)と記載し出生届、死亡届書類を同時に提出したのである。
窓口の職員は一瞬怪訝な顔つきをしたが、事情を察したのか無言で書類を受け取ってくれるのであった。

禮子の兄と二人きりで多磨火葬場に出向き、真っ白な花々を小さい棺一杯に入れ茶毘に付した。
火葬場の煙突から薄く白い煙が真夏の天空にゆるゆると昇るのを見上げ、涙が止まらず白昼夢を見ているのではと思うのであった。
遺骨は暫くの間、禮子の父の菩提寺、新井薬師の東光寺で供養、預かって貰う事にした。

禮子が体力的、精神的にも大分回復した秋半ば、山口県長門市仙崎にある継家の

菩提寺、西覚寺に納骨するため、特急「さくら」寝台車の人となった。
東海道を西へ下る寝台車のベッドで我が子と別れる最後の夜が居た堪れなく悲しく、二人して小さな箱に納めた骨壺を抱き寄せ泣き伏すのであった。
西覚寺で供養を済ませ、私は祖父、祖母の骨壺が安置された半地下の墓室に潜り込み、美佳子の骨壺を祖父、祖母の骨壺に挟まれるよう真ん中に安置して「あなた方の曾孫の美佳子です。寂しがって泣かないように守って下さい」と何度もお願いをして手を合わせたのである。

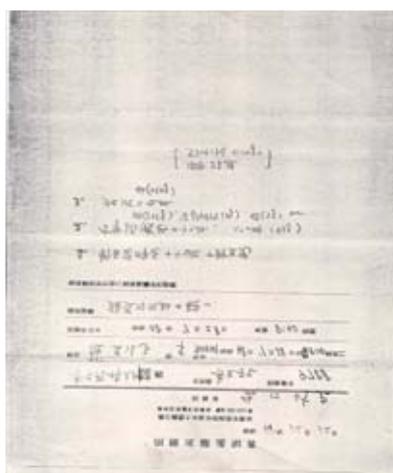


納骨を済ませて(仙崎、西覚寺)

美佳子の解剖結果通知書が届いたのは死亡から4ヶ月も経過した12月で通知書には病理組織学的診断:1. 新生児肺炎+うっ血 2. 全身諸臓器のうっ血 3. クモ膜下出血。

臨床診断:頭蓋内出血の疑いとあった。

たった数行の通知を書くのに何故4ヶ月も要するのか素人には分らないが、A医師からも特に説明もなく釈然としないままとなった。



解剖結果通知書

翌年の昭和49年9月30日、父の紹介を受けた文京区目白台の東京大学病院分院(平成13年4月閉院)で長男淳(あつし)が生まれた。

11. 再び北の大地札幌へ 札幌時代(昭和50年～昭和54年)

● 福岡転勤予定が札幌に

昭和50年6月中旬、前年竣工したばかりの住友スリーエム本社ビル(世田谷区玉川台)の周りは、住友スリーエム労働組合の赤旗で埋め尽くされ異様な雰囲気の中にあつた。

7月10日支給予定の夏期ボーナス闘争で、組合要求3.5ヶ月に対し、数度の団体交渉を重ねても会社側回答は2.4ヶ月で一步も引かない。

終に団体交渉は決裂となりストライキに突入していたのである。

ストライキに入ったのは私が所属する磁気製品事業部の製造部門、営業部門であつた。

当時、磁気製品事業部の売上は全社の30%程を占め、会社側に与える影響は大であり会社側は譲歩するであろうとの労働組合幹部の読みがあつたのである。

昭和47年、住友スリーエム労働組合は正式に合化労連に加盟、威勢の良い発言から「太田ラッパ」と呼ばれた元太田黨合化労連委員長が応援に駆けつけたこと等から会社側を刺激し、労使譲らぬ状況が数年続いていたのである。



住友スリーエム本社(H25年耐震問題で取り壊し)

結局ストライキは中央労働委員会の斡旋により、ボーナス支給日を過ぎた7月20日、月数2.7ヶ月で妥結しストライキは解除となつた。

ストライキ期間中、管理職が対応したとはいえ、1ヶ月半も工場はおろか営業職までがストライキに入る様な会社の製品は購入出来ないと言われ、民放テレビ局、大手コンピューターメーカーから非難反感を持たれることになってしまった。

その結果、磁気製品事業部の売上が激減する打撃を受けたこともあり、その年の住友スリーエム年度決算は会社創設以来、初めての赤字決算を出したのである。

会社ばかりかストライキに入った我々営業マンもストライキ後、取引先からの信頼回復を得るのに多大な労力を要することになり組合幹部を恨んだりしたものであった。

私はストライキ突入前の6月上旬、上司から7月16日付で課長職昇進含みで福岡支店勤務の内示を受けていた。

長期ストライキ期間中、労働組合幹部から磁気製品事業部ばかりか他事業部管理職との接触は電話、密会など一切禁じられたことから、転勤内示の件を含め情報が全く得られないまま辞令を拝命すべき7月16日が過ぎてしまった。

このような状況から内示は棚上げ取り消しになっただろうと私は高をくくっていたのであるが、ストライキ解除後の7月下旬、久々に出勤すると上司から福岡支店転勤は無くなり、8月16日付で札幌営業所勤務にするとの内示を受けたのである。

南から北への内示変更には戸惑いながらも、慌しく引越しの準備に取り掛かったのであった。

● N君と再会 トヨタカーリーナを2台購入

8月下旬、家内と1歳11ヶ月の長男淳(あつし)を伴って札幌へ赴任した。

北海道外からの転勤社員の多くは市営地下鉄南北線終点の真駒内周辺に居を構えていたが、私は札幌を象徴する山、「藻岩山」の麓に近い南17条西17丁目にあるアパートを北海道生活の拠点に定めた。

札幌生協や地元スーパー、幼稚園も近くにあり、車も有料ではあるがアパート前の広場に駐車する事が出来る生活環境の良い所であったからである。

札幌営業所は所長以下13名の社員で磁気製品、反射材製品、自動車補修製品、ヘルスケア製品等、住友スリーエムの主力製品事業部の部員が1, 2名ずついるだけの小さな所帯の営業所であった。

私は課長職として市販向けカセットテープ販売だけでなく民放TV局、公官庁、銀行等へ納入する業務用ビデオテープ、コンピューターテープの販売、新規顧客開拓の責任者に任じられたが、7月のストライキによる影響で北海道の磁気製品市場は壊滅状態に近く、一からの建て直しが必要であった。

取引先へストライキのお詫びと、着任挨拶周りが一段落した9月下旬、大学卒業後、社会人生活の一步を踏み出しながら、たった4ヶ月で退職した札幌トヨタ自動車に同期のN君、M君がまだ勤務しているか消息を知りたく札幌トヨタ自動車人事部へ恐る恐る電話をしてみた。

M君は既に退職していたがN君は市内元町営業所に勤務していることが分かり早速、N君を営業所に訪ねることにした。

札幌トヨタ自動車に同期のM君を介し辞表を出し、逃げるように帰郷した日、M君、N君が札幌駅ホームまで見送りに来て呉れていたのに列車の便所の影に隠れ別れの挨拶をしなかった事の許しを得たかったのである。

N君は8年前の事など忘れたよと笑顔で出迎え、私の札幌転勤と再会を喜んでくれたのだが、私は心のつかえが取れたことに涙が出るのを抑えられなかった。

改めて札幌での付合いを再スタートさせるべく、飲み会の約束した帰り際「継よ、札幌トヨタ自動車出身なのに日産の車で北海道内を走る事は絶対許せないぞ」と一喝された。

目立たないように、営業所の隅に日産ブルーバードを駐車していたのだが、N君に目ざとく見つけられていたのである。

再会から数日後の10月上旬、ブルーバードを下取りに出しN君と「トヨタカーナクーペ」の購入契約をした。月曜日から釧路、帯広への出張であったが、早く新車に乗りたくて日曜日の夕刻、アパートから2Km程にある大通り公園近くの新車配送センターへ車を取りに行き、新車の匂いに浸りながらアパート駐車場に戻ってきた。

翌日、釧路市内での仕事を終え、ホテルに入ると家内から電話が欲しいとのメモが残されている。何事かと電話をすると「朝方、お隣のMさんお迎えの車に追突されてカーナが傷つけられた」との事であったが出先では詳細が不明で要領を得ない。

4日後、網走、北見、旭川の仕事を終え、新車の事が気になりながら札幌に戻りカーナを見ると、後部トランク部分がへこみ、塗装が3cm四方剥がれ落ちていた。

仔細を家内から聞けば私が出張に出掛けた日の朝、アパート左隣に住むMさんを迎えに来た、お抱え運転手がブレーキ操作を誤り、カーナに追突したとのこと、Mさんはスリーエムとも取引のある大手外資系Iコンピューターメーカーの札幌支店長で運転手付きの車で朝晩送り迎えされていたのである。

私の帰宅をMさん宅で待っていた運転手さんがMさんと私の家を訪れ、全面的に自分に非があり、板金塗装修理代金は全額負担するので了承して欲しいと謝りに来られた。

しかし、私としては違法駐車をしていた訳でもなく、配車センターから往復4kmしか走行していない新車に傷を付けられた事に心外で「板金塗装では納得出来ない新車で弁償して欲しい」と屁理屈を主張して譲らず、その晩は結論が出ず物別れとなった。

翌日の夜、Mさんが私の家を訪れ、「同じカーナクーペを新車で弁償します。諸費用も全てこちらで負担します」と言ってこられた。まさか屁理屈が通るとは思っていなかった私は驚いたが大企業の支店長であれば経費は会社持ちで大した事では無かろうと

無節操にもお言葉に甘える事にしてしまった。

N君に連絡、ぶつけられた車を下取りに出し、たった2週間の間に2台目のカーリーナクーペを購入する事になったのである。何かMさんに申し訳なく後味の悪い出来事であった。

Mさんは私の東京転勤と同時期に東京に戻られ、しかも私が住むことになる横浜の家から30分の地に住居を構えられ、お訪ねし札幌時代の話に花を咲かせたのだが、病を得、しばらくして亡くなられた。ご冥福を祈るのみである。



2台目のカーリーナ(車内に家内と淳)昭和51年冬

● 家庭用ビデオテープの黎明期

昭和50年、SONYが*(注8)ベータマックス方式(以下ベータ)の家庭用ビデオデッキ1号機を発売した。

* (注8)ベータマックス方式ビデオデッキ

録画テープに隙間無く記録できる「べた書き」と、最高性能という意の「MAX」を組合せ Betamaxと命名された。画質等、性能的には優れたビデオデッキであったがビクターが開発した VHS (Video Home System) より部品点数が多く、調整箇所も多く高い調整精度を要求され、量産、低価格化には不利であり、VHS との規格競争に敗れた。平成14年開発メーカーSONYも製造中止した。

昭和53年秋口、年末需要を見込み普及機種 of ビデオデッキが SONY から発売された。普及機種とは言え店頭価格が22万円もするビデオデッキであったが北海道内でも少量台数ながら札幌市を中心に販売台数を伸ばし始めていた。

その頃、親会社の米国スリーエム社は家庭用ビデオデッキ普及を睨み家庭用ビデオデッキ用録画テープの技術開発に力を入れており、その開発した自信作から日本国

内でスコッチベータ用録画テープ(以下スコッチビデオテープ)を全国導入すべく計画がなされていた。

全国導入に先立ち、北海道でテストマーケティングを年末の需要期11月12月の2ヶ月間、実施する事が9月に決定し札幌営業所磁気製品販売部の3人はテストマーケティング準備のため急に忙しくなった。

TVコマーシャルが札幌テレビを中心に全北海道に放映されるため、何としても北海道内の販売店に広くスコッチビデオテープ置いて貰う必要があった。

10月に入ると本社宣伝部、磁気製品マーケティング部、東京支店の磁気製品営業マンが札幌営業所に集結。テストマーケティングに備え、販売力があり販売網の充実しているダイエー、イトーヨーカ堂、NEBA(日本電気大型店協会)加盟の光洋無線、そうご電器の各販売店をくまなく回り、スコッチビデオテープの受注、店頭売り場確保、POP(販売促進物)の設置を行った。

どの取引先もTVコマーシャルが入るという事から好意的でSONY、FUJI、TDK等、競合品のビデオテープの仕入れを控えて貰えたのは非常に助かった。

60分録画できるベータ用ビデオテープが1巻、1500円もする時代であった。

テストマーケティングの販売促進活動の中に、ビデオ録画の楽しみを啓蒙する企画があり、私は家族全員で(次女恵美子が昭和52年7月18日札幌医科大学で出生し4人家族)札幌地下街にある札幌テレビのサテライトスタジオで開催されたトーク番組に借り出され出演した。

この時に録画して貰ったビデオテープは家族全員がビデオテープに記録された第1号で記念として今でも大切に保管している。

スタジオでのトーク番組に、誰構うことなく長男淳(あつし)と次女恵美子が喧嘩していたり、片言で喋る様子が録画されているのが微笑ましく、時々再生(VHSに複製)しては札幌時代を懐かしく思い返している。



記念すべき家族が録画されたベータテープ
(昭和53年12月17日)

テストマーケティングの結果は SONY、FUJI、TDK 等のビデオテープより録画した画質が明るく、ドロップアウト (TV 画面上に白い抜けが発生すること) も少ないと好評価を得て全国販売展開に踏み切るようになった。

VHS 録画テープの導入は半年後の昭和54年6月からとなる。



昭和53年当時の淳と恵美子

● 札幌雪祭りで雪像製作

住友スリーエム親会社米国スリーエム社の本社は米国の東北、五大湖近くのミネソタ州セントポール市にある。

セントポール市は同じ北国である札幌雪祭りと巨大雪像に関心を寄せスリーエム社が中心となり昭和53年の冬、札幌市から雪像製作チームをセントポール市に招聘し雪像をセントポール市内の公園に作る事になっていた。

この縁で札幌市は米国スリーエム社の日本法人、住友スリーエムに札幌雪祭りの際、市民の広場に雪像を作らないかと声を掛けてくれたのである。しかも審査なしの無条件で良いとのことであった。

当時札幌市民の広場には、市民が雪像製作に参加できる枠が50程あった。雪像作りの参加者は雪祭り前年の12月に公募され、参加製作チームは粘土で雛形を作り応募し審査を通らなければ参加資格が与えられず、倍率は5倍にもなる人気であった。

折角のチャンスを呉れたのだし、思い出にもなるからと札幌営業所の総員13人で雪像作りに参加する事に決定したのである。

昭和53年の干支が午であった事から営業所員相談の結果、馬の頭部の雪像を製作しようということになった。

1月下旬、札幌営業所の仲間と雪像製作に取り掛かるべく手に手にスコップ、ノコギリ、ナタ等を持ち、大通り公園の割り当てられた場所に行くと、高さ3m、横幅、奥行き2m程のコンクリートのような雪の固形物がドンと設置されている。

この大きな雪の塊を前にして、塊を削り取り、馬の頭部の姿にする事が出来るのかと

札幌営業所の仲間一同、不安で一步引いてしまった。

平日は出張に出掛けている所員もあり製作メンバーは5, 6人しか集まらない。しかも夕食を済ませた夜の8時過ぎからの屋外公園での作業とあって、シバレ(凍るように冷えて寒いことを表す北海道の方言)が厳しく外気温はマイナス10度以下、幾ら厚着をしても身体は凍え、手足も冷えて作業はなかなか進捗しない。

所員の奥様方から毎夜温かい豚汁、おにぎりの差し入れがあった中、8日目の札幌雪祭り開催日初日、観光客がボツボツ訪れて来る朝9時頃になって我々の馬の雪像はようやく完成したのであった。

雪像完成当日の夕方、仕事を終え営業所に戻ると所内が賑やかである。我々が製作した馬の雪像が札幌雪祭り公式絵葉書に載っていると所員達が絵葉書を見て喜び騒いでいたのであった。絵葉書を見て厳しいシバレにもめげないで馬の雪像を製作したことが報われたような気分を味わった。早速、記念にしなければと絵葉書を購入しに営業所を飛び出していた。



雪像制作中、左から2人目が私



公式絵葉書に載った馬の雪像

第29回札幌雪祭りが終わった翌朝、人気のない大通り公園に行くと全ての雪像は跡形も無く壊され、雪の塊が降りしきる雪の中に、ごろごろと転がっているだけであった。

12. 東京支店勤務時代ーその1(昭和54年～昭和62年)

● 大沢商会倒産

昭和54年9月、4年間の札幌勤務を終え磁気製品事業部東京支店に配属となり市販ルート専任の仕事に戻るようになった。

4年の年月の間に東京支店は部員を始めとして様変わりしており古参の前任課長から

有らぬ中傷を受け新組織に纏めあげるまで大変苦勞を要した。

札幌営業所勤務時代、テストマーケティングを実施したビデオテープだが市場は黎明期であり、市販ルートではカセットテープが相変わらず主力製品であった。

当時、カセットテープの売れ筋商品はC-60(一時間録音テープ)でSONY、TDK、FUJI、MAXELLが市場の大半を握っていた。

スコッチは相変わらず品質改善が進まず、消費者からの評価も低い上に特約店卸価格が他社より高く、特約店からも見放される寸前状態であった。

その状況下、赤字続きの磁気製品市販営業部は本体事業部から離されコンシューマー営業部に組み入れられ人身御供状態となったのである。

苦難の屈辱時代が一時続いたが結局、赤字改善に到らず元の鞆に収まる事になる。

そんな組織のごたごたがあった昭和57年にはビデオテープ市場が幕開けし、年末には、ビクターが開発したVHS方式デッキが市場占拠率でSONY開発のベータ方式デッキを抜き去り、ビデオデッキの主力方式に躍りでて来たのである。

SONY、三洋、NECを除く家電メーカー各社がVHS方式ビデオデッキを発売、普及させた事もあり、磁気テープ市場はカセットテープからビデオテープに完全に移行していた。

話が逸れるがVHS方式がベータ方式を抜き去ったのは、アダルトビデオメーカーがVHSを支持したことで急激に伸張したのだと我々ビデオテープ業界では信じられている逸話である。

同じく昭和57年はヨドバシ、さくらや、BICの大型カメラ店の急成長でビデオテープ市場は家電ルートばかりでなくカメラ店ルートに拡大していた時代でもあった。

昭和58年5月、マミヤカメラの販売を独占し、充実した全国販売ネットを持つ大沢商会の子会社オオサワオプティマージ(以下オオサワ)と特約店契約がなりスコッチビデオテープをカメラ店ルートに大々的に販売拡大する切っ掛けを掴んだのである。

毎年11月、12月は年末年始に放映される紅白歌合戦、レコード大賞、隠し芸大会等のテレビ番組を録画する人が多く急激に需要が伸びる季節であった。

このビデオテープ需要期を見逃してはならないと、11月に入るとオオサワは大量のスコッチビデオテープを仕入れ、カメラ販売店に販売して呉れたのである。

年末年始の需要期に絶好調の販売実績をあげ、営業活動が一段落していた忘れもしない昭和59年2月29日、私が午前8時過ぎ出社し机に座っているとH部員が血相を変え駆け寄って来た。

「今朝の毎日新聞を見ましたか、『大沢商会行き詰る会社更生法適用を申請』という記事が1面に載っています。これです」と毎日新聞を私に手渡したのである。

日本経済新聞、朝日新聞を購読していた私は、その日の朝刊に大沢商会の記事など見ておらず毎日新聞のスcoop記事に自分の目を疑った程である。

しかも1週間前に、経理部与信(取引会社の経営状況を分析、未回収が発生しないように取引金額枠を設定する)担当者から「オオサワの与信金額枠は問題ないから、これからもガンガン売って下さい」と連絡を受けていたので、なお更のこと「大沢商会行き詰る」との記事が信じられなかったのである。



「大沢商会」行き詰まるのスcoop記事
昭和59年2月29日毎日新聞朝刊

大沢商会が破綻なら子会社のオオサワオプティも当然連鎖倒産である。オオサワの支払い条件は毎月20日締切り、同日起算90日の約束手形であり11月、12月、1月分は約束手形を受け取っていたが不渡り手形となってしまったのは間違いなかった。

私は事の重大さに、その場でオオサワに電話を入れたが、お話中で繋がらない。

そうこうしている内に、大沢商会倒産を知った本社の上司O営業部長、経理部S部長から事実確認の電話が掛かって来るが詳細は不明で説明できない。

S経理部長は「損害金額は住友スリーエム設立以来、前代未聞の高額9、800万円に上り、磁気製品市販営業部の責任は逃れられないですよ」と脅迫紛いの発言で私を脅すのである。

それに対し、私は「1週間前、経理部与信担当者からオオサワオプティの与信金額枠

は問題ない、もっと売って下さいと言われたばかりですよ、そんな与信管理者を置いて
いる経理部にこそ問題が有るのでないか」と逆にS経理部長に言い返したのであった。
10時過ぎになってオオサワF社長から、「倒産は事実です。スコッチビデオテープは
他の債権者が倉庫から勝手に持ち出し出来ないよう手配しました。在庫分はお返し出
来ると思う、状況説明はこちらから逐次入れます」と電話を呉れたのである。
この日から責任はともかく住友スリーエムが9,800万円の損害をこうむったのは事実
であり、関係部署と善後策を話し合う日々が続くことになったのである。

私は目黒公会堂で開催された債権者会議に会社を代表し数回出席した。
債権者会議内容をS経理部長に報告したが、被害金額の10%を回収出来れば上出
来と彼は諦めた口調で言い、損害金額は貸倒引当金で対処することになるであろうと
の事であった。

倒産から2週間後、誠意あるF社長の計らいで、倉庫に在庫してあったスコッチビデ
オテープは全て回収、更に時が経った2年後には被害金額の約半額5,000万円を
回収することが出来たのであった。

これだけの金額を回収できたのは稀有な例であるとS経理部長が、しみじみ語り営業
部の協力に感謝の意を表して呉れ全面解決ではなかったが、ほっとしたのも事実であ
る。

● 特約店会発足(昭和61年)

オオサワオプティマージ(以下オオサワ)の倒産事件後、オオサワ傘下の大型販売
店を住友スリーエムとの直接取引にすべく働きかけたが与信問題上、全ての販売店を
直接取引先にする訳にはいかず、移管出来るカメラルート特約店の新規開拓が急務で
あった。

カメラルートでは富士フィルムの子会社FUJIMAグネが断トツ強く、カメラルート参入を
再度画策する我々にはオオサワを失った痛手は大きかった。

その後カメラ店に三脚などカメラアクセサリを卸していたM商会を特約店にする事が
出来、何とか火事場を凌ぐことが出来た。

当時ビデオテープ市場ではTDKが他社製品を扱うことが出来ないTDK専売特約
店を全国に設置しビデオテープ市場シェア1位を誇っていた。日立電機の関連子
会社MAXELLも着々と市場拡大に乗り出していた。

このようなビデオテープ市場の環境下、住友スリーエム磁気製品市販営業部では既存
特約店からの更なる協力を得、拡販するためには特約店会を発足組織し強化する必
要に迫られていた。

昭和61年4月、仕入れ金額に応じたりべート制導入、販売促進協力金の援助などメ

リットを付与することで、特約店会に加盟して呉れるよう既存特約店を説得、賛同してくれた有力特約店12社を持って特約店会発足に漕ぎ付ける事ができた。

特約店会名称は、私の発案で住友グループの社長会「白水会」(江戸時代住友家が「泉屋」と号して銅商を始めたことに由来し「泉」を上下に分け「白水」とした)から泉の一字を拝借、更に磁気製品の「磁」を取り「泉磁会(せんじかい)」と名付けた。



「泉磁会」メンバーに配布した皮製バインダーに刻印した「泉磁会」ロゴマーク

「泉磁会」発足後、スコッチビデオテープの更なる拡販を図るべく、後藤久美子をテレビコマーシャル、テレフォンカードに起用するなど販売促進活動を積極的に実施したことにより、スコッチビデオテープのシェア(各社加盟の磁気記録工業会に毎月、出荷数量を報告するので各社シェアが分かる)は10%となり、カセットテープ時代から続いたスコッチブランドに対する汚名を払拭したのであった。



後藤久美子を起用したテレフォンカード

●カルガリー冬季オリンピックに特約店を招待(昭和63年)

シェア争いの厳しいビデオテープ業界であったが、スコッチビデオテープに強力

な追い風が吹いた。

昭和62年秋、親会社である米国スリーエム社が昭和63年2月カナダで開催される第15回カルガリー冬季オリンピック大会の公式スポンサー(その後もバルセロナ、ソウルの公式スポンサーとなった)になることが決定したのである。

米国スリーエム本社を始めとして世界各国のスリーエム子会社は、莫大なスポンサー協賛金(スリーエム社は5億円と聞いた)を支払う代わりに、取り扱い製品、販売促進物等に五輪マークを付け宣伝、販売することが許されることになった。

我が住友スリーエム磁気製品市販営業部はカルガリー冬季オリンピックの公式スポンサーであることを全面的に打出し一般消費者向けにはスコッチビデオテープを購入し応募すれば抽選でカルガリー冬季オリンピック観戦ツアーに2名ご招待、オリンピック関連商品が当たるというキャンペーンを大々的に展開した。

更に特約店会「泉磁会」メンバーには年末年始需要に向け通常月の2.5倍の仕入れ目標金額を達成すれば特別仕入れリベートを付与すると共にオリンピック観戦ツアーに各社1名ご招待する販売促進策を仕掛けた。

カルガリー冬季オリンピック大会の公式スポンサーのお墨付き効果は絶大で我々は昭和62年の年末年始商戦を優位に戦う事が出来た。

仕入れ目標金額を達成した特約店が9社あり、オリンピック観戦ツアーにご招待することになり「泉磁会」の事務局長をしていた私はオリンピック観戦ツアーに、お供させて貰うことになった。

米国スリーエム本社表敬訪問の後、カルガリー冬季オリンピック大会開会式、スキージャンプ、フィギュアスケートペア、アイスホッケー競技等を観戦し、バンフ、バンクーバーを観光して回る9日間のオリンピック観戦ツアーであった。

昭和63年2月13日、薄曇りの日であったが、「泉磁会」メンバー始め、各国スリーエム関係者は会場メインスタンドに陣取り、開会式に臨んだ。

開会式の演出は素晴らしく数々のパフォーマンスに観客一同感激、我々日本人は橋本聖子(現参議院議員)を旗手とする日本選手団の行進に日本国旗の小旗を振って他国の応援団に負けじと大声をあげ声援を送ったのである。

期待されたスキージャンプ70m級は凍えるような屋外で日本選手に声をはらし応援したが佐藤晃の11位が最高で日本選手は惨敗に終わった。金メダルはフィンランドのニッカネンであった。

フィギュアスケートペア、アイスホッケーも観戦したが世界のトップアスリート達のレベル

の高さには驚くばかりであった。

フィギュアスケートの伊藤みどりは5位に終り、カルガリー冬季オリンピック大会で日本選手は振るわず、唯一のメダルはスピードスケート500mの黒岩彰の銅メダルのみであった。



開会式、日本選手団に声援を送る

オリンピック観戦時のスリーエム社宿泊地はカルガリー市郊外にあるゴルフクラブのゲストハウスであった。

ゲストハウスには米国スリーエム本社社員、世界のスリーエム子会社社員、そしてオリンピック観戦の招待客が宿泊、毎晩パーティーが催され国際交流の場となって盛り上がり、それは楽しい時を過ごすことが出来た。

招待した泉磁会メンバーもオリンピック観戦ツアーを満喫されて帰国、昭和63年春のスコッチビデオテープのシェアはTDKに肉薄する20%までになっていたのであった。

13. 東京支店勤務時代ーその2(平成元年～平成7年)

● バラエティTV番組に出演

昭和64年1月7日午前6時33分に昭和天皇が崩御された。

NHK始め民放テレビ各局は、朝から晩まで昭和天皇を偲ぶ番組を放映し、昭和生まれの私にとっては何か重苦しい1日であった。

午後2時半過ぎの記者会見で時の小渕内閣官房長官より「平成」に元号が変わる旨の発表があった。

元号の由来は『史記』五帝本記(ごていほんぎ)「内平らかに外なる」、『書経』大兎模(だいうぼ)「地平らかに天なる」からの出典で「国の内外にも天地にも平和が達成され

る」という意味が込められていると説明があった。

翌1月8日から「平成」に元号が変わったが何かしっくりしない元号であった。



元号を発表する小渕内閣官房長官

昭和天皇崩御から1週間後の1月14日午後2時、私は四谷にある日本テレビの出演者控室にいた。

当時、高校生を中心に絶大的な人気のあったテレビ番組*(注9)「鶴ちゃんのプッツン5」の中の「お！NEW」というコーナーに出演するためであった。

夕刻5時10分からの生放送なのだがリハーサルがあるため本番3時間前にテレビ局入りさせられたのである。

「お！NEW」というコーナーは様々な業界の発売まもない新商品を、メーカー側の出演者が商品の特徴を説明、それを受けて「おきゃんぴー」と言う女性のお笑いコンビが、突っ込みを入れたりして更に商品の良さを引き出すというコーナーである。

4分ほどの短いコーナーであったが商品の宣伝効果が大であるためメーカー各社から申し込みが多かったそうである。

***(注9)**「鶴ちゃんのプッツン5」

昭和61年10月から平成4年9月まで毎週土曜日の夕方1時間20分にわたり生放送され、毎回多彩なゲストが出演、若年層に圧倒的支持を得た日本テレビの人気バラエティ番組。司会を片岡鶴太郎が務めた。

当時、ビデオテープメーカー各社は画質の鮮明さ、明るさを追求した高画質ビデオテープの開発に凌ぎを削っていた。

我が住友スリーエムは高密度磁性粉を開発、更に*(注10)バックコーティング処理を施したスコッチビデオテープEG(エコミーグレード)を開発、満を持して発売することになったのである。

バックコーティング処理はテープの裏面塗布工程が増え、生産コストが嵩むため、競

合他社は価格の高いワンランク上のHG(ハイグレード)テープにしか採用していない処理技術であった。

スコッチビデオテープは同一工程で、テープ表面に磁性粉を、裏面にバックコート素材を塗布する新型製造装置を開発した事により、製造コスト低減が図られ、スタンダードテープにもバックコーティングを採用出来たのである。

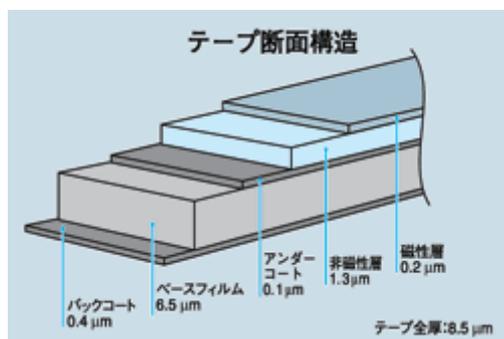
スタンダードテープにバックコートをした画期的スコッチビデオテープEGの拡販のため関東地域は日本テレビ、関西地域は読売テレビを使って前年の12月からコマーシャルを入れていたのである。

「もうハイグレードはいらない」と言う、競合他社を刺激する挑戦的なキャッチコピーであった。

***(注10)バックコーティング処理**

ハイグレードビデオテープは下図「テープ断面構造」の如くベースフィルム表面にアンダーコート(接着材)、非磁性層を、そして磁性層を塗布。裏面にカーボン素材を塗布することからなっている。この裏面処理をバックコーティングという。廉価なテープはこの処理を施さない。

バックコーティング処理をする事で、テープ走行性、耐久性が良くなり、更に静電気の発生を防止し、高画質の再生画像が得られる。



ビデオテープ断面構造概念図

通常「お！NEW」コーナーへのメーカー出演者は製品開発者か宣伝部の人達であったが、磁気製品AV販売部マーケティングでは販売の第一線に携わっている人間を出演させようと言うことになり東京地域の営業責任者の私に声を掛けて呉れ出演することになったのである。

生放送番組で緊張してあがるかと思っただが、バラエティ番組という気軽さもあり本番中、声が上滑りしたり足が震えるような事はなかった。

ただ打合せと異なる質問を「おきゃんぴー」から突然振られて一瞬詰まり、思いつきの

回答をして凌ぐ場面があり少しあせってしまった。

身内にしかテレビ出演を知らせていなかったのだが、家に戻るなり、高校時代の友人から見たぞと電話が入ってきたし、3月に行われた高校時代の同期会でも「鶴ちゃんのプッツン5」に私が出演していたのを見たとき多くの友人に言われテレビ放送の影響の凄さを身を持って実感したのであった。



番組台本

● ビデオテープ新宿価格戦争勃発

現在であれば公正取引委員会の眼がありメーカーが販売価格を統制管理することは難しいと思われるが敢えて販売価格に口を挟まざるを得なかった当時の出来事を記録に留めておきたい。

世の中は平成の時代に移りビデオデッキの普及率が急速に高まる中、ビデオテープメーカー間のシェア競争、販売店間の販売価格競争は熾烈な状況下にあった。

特に新宿地区では西口に本拠を構えるヨドバシカメラ(以下ヨドバシ)本店のすぐ右隣に、東口が本拠のさくらやが西口店を出店したことから本格的なビデオテープ価格戦争が始まった。

新宿には歌舞伎町界隈に、いわゆる裏ビデオメーカーが多くあり、数百巻単位でヨドバシ、さくらやでビデオテープを購入し販売店側としては、美味しい商売になっていたのである。

そんな折、スコッチビデオテープはスタンダードテープにもバックコーティング処理を施し「もうハイグレードはいらない」と、競合メーカーのハイグレード品と同等の画質が得られる高品質ビデオテープEGを発売したのである。

ハイグレードテープに匹敵する高品質ビデオテープがスタンダードテープ価格で購入出来るスコッチビデオテープは評判が良く、喜んで良いのか分からないが一般消費者

ばかりでなく、裏ビデオメーカー関係者にも認められ売上げを伸ばしていたのである。

平成元年の春先と記憶しているが、さくらや商品部のN課長から突然電話があり「今すぐ商品部に来い！」と怒鳴り声を上げるのであった。「何かありましたか？」との私に「何も、へったくれもない、すぐ来い！」N課長の声は裏返っていた。

新宿区役所近くにある、さくらや商品部に駆けつけると、N課長の話は「西口のヨドバシ本店がスコッチEGを、さくらや売価の550円より50円も安い500円で販売している、こちらは更に安い490円で売るから覚悟しろ」と言うのである。

これは一大事とばかり西口に行きヨドバシのビデオテープ売場を見るがスコッチEGの売価は550円のままである。何だN課長のミス情報かと、ほっとして隣のさくらや西口店に行くと、こちらは早くもスコッチEGに490円の売価ラベルが貼ってある。

さくらや西口S店長にヨドバシは550円なのだから売価を上げて下さいとお願いするが、「何時もスコッチEGを大量購入して呉れる客が1巻500円のヨドバシの領収書を持ってきて、さくらやでも安くしろとクレームがあった。だから商品部に話を通して490円売価にしたのだ、文句を言われる筋合いは無いし売価は戻さない」と言うのである。

S店長との交渉は埒があかず決裂し店を出て、隣のヨドバシの店頭を見るとなんとスコッチEG480円！とポスター大きく貼られている。ヨドバシのビデオ売場主任がさくらやのスコッチEG490円売価を知り対抗手段に出たのであった。

今度はヨドバシ商品本部K部長を訪ね価格を元に戻して呉れるよう、お願いするが「店頭売価を下げたのはさくらやが先ではないか、先方が戻すまで売価は戻さない、さくらやと交渉して出直して来い」と突き帰されてしまった。

480円で売価は下げ止まったままであったが、ヨドバシ、さくらや商品部双方、意地を張り合い譲歩して呉れない。意地を通された、こちらとしては堪ったものでなかった。

この販売価格は即日、秋葉原、池袋に飛び火し秋葉原の販売店や池袋のB I Cカメラ（以下B I C）からもスコッチEGの480円売価にクレームが相次ぐが事態は解決しないまま1週間が経過してしまった。

肝心の解決策は関係者に迷惑がかかり差しさが有るので書けないが10日目にして売価は元の550円に戻ったのである。

このような両店間の店頭売価問題は、その後も突発的にではあるが2年間に亘り続くのであった。

2社の売価調整ですんでいる内は良かったが、新宿東口さくらやの隣にヨドバシ東口が出店、更にディスカウントのキムラヤが東口に出店するに及んだ事で三つ巴の売価戦争に突入、更に池袋B I C本店の近くにさくらやが池袋店を出店。売価問題は終始が着かない泥沼状態に落ち入ってしまった。

当該会社外を担当する営業マン、その営業マンを指揮する私は売価調整に翻弄され疲弊してしまった。時々スコッチEGの店頭売価が100円になっている夢を見るようになり寝起きも悪くノイローゼ寸前状態で出社するのが、ほとんど嫌になっていた。

しかし、部下の営業マンが音を上げること無く、売価問題処理に前向きに努力して呉れている姿を見ると、「大雨が降り続ける事はない、きっと止む日が来る、これは試練だ逃避しては絶対いけない」そして結婚式に速水チャプレンから贈られた聖句「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す」を思い起し、部下共々お互い我慢し叱咤激励し合い解決に当たったのであった。



現在の新宿ヨドバシ本店



さくらや東口店



現在のB I C池袋本店

ヨドバシのK部長、さくらやのN課長、B I CのY部長は、その後皆さん取締役重役に成られ、今でも一線で活躍されているが価格戦争から数年後、新店オープン時などに店でお会いすると、お三方とも「あの時はスコッチさん大変だったよな、問題が起こると逃げてしまうメーカーもあったけど、スコッチさんは逃げずに良く頑張ったね」と言っていたのである。

カメラ大型店の急成長に伴うビデオテープ価格競争に巻き込まれ苦労もあったが営業マンとして若い社員共々、社会人として成長させて貰ったのも間違い

ない事実である。あの時代、問題から逃げださず、前向きに立ち向かって解決にあたった事は本当に良かったと今更ながらに思うのである。

あれから20年余近く経ったが「まあい緑の山の手線、真ん中通るは中央線♪・・・新宿駅前ヨドバシカメラ♪」「東が西武で西東武♪・・・B I C、B I Cカメラ♪」「安さ爆発・・・さくらや♪」の商業ソングがガンガン流れる店頭を通る度に、売価戦争がトラウマになっているのか虫酸が走り身構えてしまうのである。

これも元営業マンの性であるのか切ない気持ちになるのである。

栄枯盛衰、さくらやは今は無くN課長はどうされているであろうか。

14. 父の死(平成2年7月)

● 脳梗塞に倒れる

昭和59年4月、三浦市の財政難から三浦市立病院の名誉院長送迎専用車が廃止される事になった。

近所に住む病院職員が送迎していただけるとの事だが、医者である父は帰宅時間が不規則で迷惑を掛けるからと遠慮してバス通勤を始めた。

暫くするとバス通勤は不便と思ったのか70歳を過ぎている父は自動車免許を取得すると言い出し自動車教習所通いを始め、なんと2ヶ月半で自動車免許を取得したのである。

そして小型車を購入し嬉々として車を運転し病院通いを始めたのである。

昭和61年春、父は健康診断時の胸部レントゲン写真を診て自分が肺癌であることを知るのである。

医者の不養生だが、早期発見で癌の部位も小さく手術すれば問題ないと自ら診断し、勤務する三浦市立病院で手術することに決めた。しかし三浦市立病院の医師達が、万一を考え医療設備が整った父の母校である東京大学付属病院での入院手術を強く薦めたので、頑固な一面もある父も従うことにしたのである。

癌部位を摘出し肺癌手術は成功、他への転移もないと一安心し手術後の養生に努め退院を待つばかりであった。

ところが高血圧による動脈硬化発症のためか手足に痺れを感じるとの父の言葉に、主治医が脳の精密検査をして診ましようと言うことになり退院は先延ばしとなった。

頭部CTを撮るため造影剤を注入した事による影響か頸部動脈内の血瘤が脳に飛び、精密検査で済むどころか父は脳梗塞を発症してしまったのである。

母によると父は脳梗塞発症を恐れ造影剤注入によるCT検査を避けようとしていた節があったとの事だったが、時すでに遅しであった。

左脳の部位に梗塞が発症したことで、右半身不随、更に言語中枢が侵され自由に喋れないし、父の医者としての現場復帰は不可能であろうと主治医から説明があった。

ベッドに寝かされた父は、昨日までの温和であった顔が嘘のように歪み、直視するのも辛い形相になってしまった。

3日程で脳梗塞発症による死の危機状態から脱したが、父は自分の症状を医者としての本能から理解するのか、顔を歪め呻くような声を発し涙をボロボロ流すのである。私は父が涙を流す顔を見て、どのように慰めて良いのか言葉が見つからず、ただただ気が動転してしまうばかりであった。

脳梗塞発症後2ヶ月間、東京大学付属病院でリハビリテーションを受けお世話になったが、リハビリの専門医が多くいる神奈川県厚木市内の七沢リハビリテーション病院に転院する事になった。

季節は暑さ厳しい夏へと移り、本来であれば父は肺癌手術を終え退院、現場復帰を果たし医者として活躍しているはずの頃の転院であった。

休みの日の度に私は見舞いに出掛け、父に話し掛けるが言語中枢に障害を持つ父との会話は成り立たない。子供の頃から親しく父と話した事のなかった私は折角、ゆっくり話す機会が出来たのに会話が出来ないのが残念でならなかった。

私がレポート用紙に「具合はどう？」「何か食べたい物はある？」とサインペンで大きく書き、それに対し父が首を縦横に振り応答するという言葉に依らない父子の会話を交したのである。

父が明瞭な言葉を発声できないのは残念であったが、七沢リハビリテーション病院入院の時ほど筆談とは言え親子の絆を深めた会話が出来たことは無かったと思っている。

入院時、父の手足の爪が伸びているのに気づき、爪を切ろうとすると、脳梗塞発症前の父であれば毅然とした態度で拒んだであろうが、幼児のように素直に手足を私に投げ出し、されるがままにしている父の姿が不憫でならず父の爪先が涙で霞むのを堪えることが出来なかった事もある。

七沢リハビリテーション病院に転院した2ヶ月後には、懸命のリハビリで父は、たどたどしいながらも幼児程度の会話が出来る様になり、杖を頼りにして不自由な右足を引き摺りながらではあるが一人で歩く事も出来るようになった。

更にスプーンなら不自由な右手で食事を摂る事も出来るようになり3ヶ月余りのリハビリを終え自宅に戻ることが出来たのである。

自宅に戻ったのだから、気軽に余生を楽しみテレビでも観ていれば良いのに父は小学生が使う平仮名、カタカナ、漢字練習帳を買ってこさせ字の書き方を懸命に練習するのであった。

脳梗塞発症から1年経ち病状が落ち着いた昭和62年夏、父は病院への復帰は叶わないと諦め三浦市立病院に退職願いを出した。

父の退職を聞き、長年地域医療に貢献したことを労うために三浦市の久野市長が、感謝状と記念品のワードプロセッサを持って、わざわざ自宅まで訪れて下さったのである。記念品を頂くならワープロが良いと父が希望したのである。

病院の職員の方が自宅まで来られて、父にワープロの使い方を教え父の頑張りもあり父は1ヶ月間で使い方を完全にマスターしたのであった。

母によると、父は心筋梗塞で倒れ死を迎える直前までワープロに向かい医学誌の記事や医学用語を入力、医者としての勉強に怠り無かったそうである。

その事を聞いた時、医者として生涯を全うしたいと言う、父の凄まじいまでの前向きな姿勢に驚愕し、私には父を超えるような生き方はできないと思ったのであった。



三浦市長から感謝状を受ける父(左)
昭和62年秋(神奈川新聞)

●寡黙だが息子思いの父

父は私が子供の頃から口やかましいことを私に一切言わない人で、私が中学、高校生時代に過干渉の母に対し狂うほどに反抗したり、医者への道へは進まないと泣きながら訴えた時も、自分の好きなことに励めと言うだけであった。

社会人になってからも、私は医者になれなかった劣等感を持ち、共通の話題が見つからない事で会話も少なく私にとって父は常に畏敬の人であった。

* 私が高校3年生の春、校医が病気で修学旅行に同行出来ないと知ると校医の代わりに医師として修学旅行に同行してくれたこと。

- * 大阪万国博覧会開催の折には、私の狭いアパートの部屋を訪れ、一人暮らしで美味しい物を食べていないであろうと高級レストランで、ステーキをご馳走してくれたこと。
- * 長女美佳子の死に際しては産科医の誠意を疑って抗議してくれたこと。
- * 私の札幌勤務時代には帯広、阿寒湖、摩周湖、野付半島への旅を計画し、共に旅行してくれたこと。

思い出の数は少ないのだが私にとっては、その一つ一つに重みがあり、畏敬の父ではあったが肝心な時には必ず息子に手を差し伸べてくれた父であったと今更ながら感謝しないではいけないのである。



摩周湖で父と私(昭和53年夏)

● 父の死を看取る

平成2年7月21日(土)の晩、会社の連中と横浜にある行きつけの店で飲み会をしていると家内から「お父様が心筋梗塞で突然倒れ入院、危篤状態なのですぐ帰宅して」と電話が入った。

驚きで酒も醒めてしまったが、多少の酒酔い運転にも構わず横浜の自宅から、家内、長男淳、次女恵美子を車に乗せ夜11時過ぎ、父が入院した三浦市立病院へ駆けつけた。

三浦市立病院は父が長年、院長を務めた病院でもあり母が緊急入院を依頼したのであった。

主治医によると父の容態は予断を許さない状態で今夜がヤマであるとの事であった。心臓モニター、人工呼吸器、様々なチューブを身体に付けベッドに横たわる父は、母や私が頑張ると声を掛けても荒い息を繰り返すだけで全く反応が無いし、手を握っても握り返さない。

日付が22日(日)に変わり、時計の針が午前2時を回ったところから父は痰が絡まるの

か苦しげにもがき、息使いが極端に荒くなってきた。

主治医や看護婦の動きが急に慌しくなるのを見て、あー！いよいよ父も最後を迎える時が来たと私は父の死を覚悟したのである。

主治医が懸命に電気ショックを施し心臓の蘇生を試みるが、ベッド横の心臓モニターに映しだされる心拍数値は減る一方、モニター上の波形は徐々に波形を画かなくなり、終には一本の横線となり動きを止めてしまった。

心臓モニターの波形が止めると同時に、父は深い、ふうーという息を口から吐き出し、荒い息を突然止めてしまった。

一瞬静まりかえった病室内に人口呼吸器がシューシュー発する音だけが、やけに大きく響いていたのを私は憶えている。

父は妻、息子、嫁、孫に末期を看取られ平成2年7月22日午前2時22分、息を引き取ったのであった。享年78歳であった。



父が勤務し死を迎えた三浦市立病院

● 思い出の通勤路を見下す墓地

平成2年7月22日昼過ぎに父の遺体は自宅に戻ってきた。

病院では父の死を現実の事として実感できず、私は涙を流すこともなかったが、父の亡き骸を目の前にすると、父との修学旅行、北海道旅行、七沢リハビリテーション病院での爪切りの事などが走馬燈の如く浮かび、嗚咽を抑えることが出来なかった。

山口県仙崎の菩提寺、西覚寺住職がつけてくれた父の戒名は「久遠院釈峯学居士(くおんいんしゃくほうがくこじ)」。死ぬ間際まで医学の道を限りなく極めようと勉強に励んでいた父に相応しい戒名であると西覚寺住職に感謝している。

通夜は7月24日、告別式は25日に自宅近くの最宝寺で営まれ、三浦市久野市長始め、病院医師、看護婦さん職員等、400名近くの方々に参列して頂いた。

人の徳は葬儀の時に分かれると聞いた事があるが、「院長先生に命を救って頂いた」と話す年老いた元患者さんや家族、「病院関係者には常に厳しい院長先生だったが患者さんには優しくった」と言われる現院長、看護婦さん達の話聞き、正しく父は

「医は仁術なり」を実践した人であったことを改めて知り息子として誇りに思ったのである。

父が36年間勤務した三浦市立病院の建物が見下ろせる高台の三浦市火葬場で父は茶毘に付された。

茶毘に付す前に棺を三浦市立病院の方に向け、父に病院と最後のお別れをしてもらった。棺が釜に入れられ鉄の扉が閉められと、突然母が真夏の青空をつんざくような声で「お父様、私もすぐに側に行きますから待っていて下さい！」と絶叫したのである。

父を亡くし生き甲斐を失った母の心からの叫びであった。

その母は現在、特別養護老人ホームに入居しているが至って元気で、まだまだ父の側に行く気配はない。(平成22年3月10日享年89歳にて没)

一旦は父の遺骨を山口県仙崎の菩提寺に納骨したが、遠隔地では墓参が叶わないので自宅近くに墓を求め供養したいとの母の強い希望で、葬儀を行なった最宝寺に墓地を買い求める事になった。

父が40年間、三浦市立病院に通勤、後年は自ら運転をして通った三浦海岸に沿った県道が見下ろせ東京湾を隔てた向こうには房総半島を眺望できる見晴らしの素晴らしい場所に墓を建立したのである。

父は長女美佳子と共に海が見渡せる墓に眠っている。

15. スピンアウトー医療機器を販売(平成8年～平成11年)

● スピンアウトにより新会社へ

平成6年頃、米国ではハイテクブームが起りナスダック上場企業のハイテク関連株の価格が急上昇していた。

一方、米国スリーエム社の株価は一時100ドルを越す値をつけたことも有ったが平成7年に入ると75ドル前後に低迷し、ハイテク関連株に比べ見劣りしていた。

この株価に対し多くの株主からクレームが米国スリーエム社に寄せられていた。

フロッピーディスク、CD-ROM、データテープ(ビデオテープは既に撤退済み)等の記録メディア事業は利益率が10%以下と他事業より極端に低く、スリーエム社の総利益の足を引張っているから株価が低迷している、記録メディア事業を他社に売却しろと言うのである。

株主からのクレームを受け、記録メディア事業を継続することは将来のスリーエム社発展の足かせに成ると経営陣は判断し、平成8年春に全世界の子会社も含め記録メディア事業をスピンアウトさせスリーエム本体から離す決定を下したのである。

更に記録メディア事業と同様収益性の悪い、医療関連機器事業も同時にスピンアウト対象事業としたのである。

米国スリーエム社は米国企業としては珍しく暗黙の終身雇用型企業と言われて来ただけに社員には衝撃的な突然のスピンアウト決定であった。

この情報を得た我々は、当然の事ながら住友スリーエムの磁気製品事業もスピンアウトの対象になり所属社員は職を失うのではと戦々恐々となったのである。

予想通り磁気製品事業部、医療用製品事業部に籍を置く90名の社員は、新会社へ出向する前提で平成8年5月1日付にて人事異動の発令を受けたのである。

労働組合員である一般社員は新会社が軌道に乗れば住友スリーエムに戻れるという条件付での異動発令であった。

私は磁気製品事業と共にスピンアウトされた医療機器製品を扱うメディカルイメージングシステム販売部へと異動になった。

昭和42年住友スリーエムに入社以来、29年間記録メディア事業部一筋の会社生活を送って来た磁気製品馬鹿の私は全くの新分野の仕事と、新会社の将来性に対し一抹の不安を覚えた。

メディカルイメージングシステム販売部は、病院の放射線科が扱う、CT、MRIの診断装置に接続し出力されるデータを読み取り、撮影された画像データをフィルム化する画像作成装置(通称イメージャー)を販売する部門であった。

スリーエム社は「ドライビュー」と言うブランドでイメージャーを製造販売していた。

従来の湿式イメージャーは診断画像をフィルムに出力する工程で、現像液、定着液、水洗いが必要でイメージャー設置場所に制約があり、且つ銀を含んだ廃液を処理する問題を抱えていた。

「ドライビュー」は従来方式と異なり、現像液など水を一切使用せず、設置場所も選ばず廃液も出さない環境に優しい、画期的な乾式フィルム画像作成装置であった。

イメージャーを製造する富士フィルム、コニカ、コダック、AGFA(独)などもフィルム作成工程方式は異なるが、水を使用しない乾式フィルム画像作成装置を開発し一部病院へ販売していた。

しかし各社共、一長一短の性能で画像診断医からは従来の湿式方式の画像に比べ解像度が劣ると信頼を勝ち得ておらず乾式フィルム画像作成装置は普及するに至っていなかった。

その中であって「ドライビュー」はフィルム解像度の改善を図り、他社に一步先んじる評価を画像診断医から受けていたが、所詮高価格であるCT、MRI画像診断装置の付属品扱いを受け、病院から購入価格を叩かれ利益率が悪くスピンアウト対象製品にな

ったと思われるのである。

因みに高性能CTは1億円、MRIは3億円以上したが「ドライビュー」本体は約700万円の販売価格であった。



写真中央が「ドライビュー」本体

● 新会社はイメーション

平成8年7月1日、新会社の名前が発表されIMATION(イメーション)であると知らされた。

IMATIONは information(情報)、image(画像)、imagination(創作力)、innovation(改革)から想起した造語であると説明があった。

5月の異動後、事務所は住友スリーエム本社に間借り状態であったが、新会社正式発足と同時に新たな環境で事業をスタートさせるべく田園都市線用賀駅に隣接する世田谷ビジネスパークへ移った。

住友スリーエム本社も最寄駅は用賀であったが駅から6、7分歩くので、雨に濡れないで済む世田谷ビジネスパークへの引越しは大歓迎であった。

新会社発足後、7ヶ月経った平成9年春先からイメーション社に転籍すれば基本給3ヶ月分の特別報酬を出すと言う条件で、一時的に異動した社員に対しイメーション社への慰留転籍工作が始まった。

しかし20代、30代の優秀な若い社員は、厳しい就職試験に受かり住友スリーエムに就職したのであって、何時倒産するかも知れない新会社のイメーション社には残りたくない、一時的な特別報酬などに誤魔かされないと住友スリーエムへの復帰を強く希望したのである。

結局、異動した社員の内、40名近くがイメーション社への転籍を拒否し、拒否者は20名位であろうと踏んでいたイメーション役員達にショックを与えた。

53歳を迎えていた私は住友スリーエムに戻っても窓際族に成り下がるだけと考え、新しい仕事に興味を持ちはじめていた事もあり、イメージョン社転籍に同意したのである。

優秀な人材も多く残ったが徐々に転籍拒否組が住友スリーエムに戻るのに伴い、社員不足が問題となり社内事務職を派遣社員に置換え、営業職も募集したがイメージョン社の知名度の低さから中々良い人材が集まらず欠員が埋まらない状態が続いた。

そんな状態のため、転籍社員の我々に大変な負荷が掛り厳しい思いをしたが残った社員同士、イメージョン社を素晴らしい会社にしようではないかと一致団結し頑張ると誓ったのである。



イメージョン本社の入居した世田谷ビジネスパークビル

● シカゴ北米放射線学会

平成8年11月末、成田から技術部S室長とノースウエスト機のビジネスクラスに搭乗し米国シカゴへ向かった。

シカゴで開催されるRSNA (Radiological Society of North America) – 北米放射線学会を視察、勉強するのが目的であった。

RSNAは、毎年11月末から12月初めにかけて1週間の会期でシカゴ市内の展示会場 McCormick Place (マコーミックプレイス) で、世界の放射線科医師、技師の学術研究発表と、最先端の放射線診断・治療機器のデモンストレーションが行なわれる86年の歴史を持つ由緒ある学会である。

スリーエム社から独立したばかりのイメーション社は新型乾式イメージャー装置を発表展示しフィルム作成のデモンストレーションすることになった。

開催オープン初日、韓国イメーションN嬢とタクシーを拾いRSNA会場に向かったのである。

ところが会場の入口ゲートで、ガードマンから学会参加企業のIDカード提示を求められ、IDカードを入れたはずの背広のポケット、鞆の中を懸命に探すが見付からない。

どうもタクシー料金を支払った時に、IDカードを落としてしまったらしい。

IDカード不携帯では1週間にわたるRSNAの会期中、会場に入場する事が出来ずイメーションのブースにも立つ事が出来ない。

ガードマンに事情を話し一時的に会場に入れて貰いイメーション社ブースまで行き私がIDカードを落とし困っていると話すと、S室長にIDカード再発行には100ドル必要だと脅されたが、居合わせた米国イメーション社のR嬢が親切に「ノー・プロブレム」と私をRSNA学会事務局まで連れて行き、「日本から来たイメーション社員でIDカードを紛失して困っている、何とか無料でIDカードを再発行して欲しい」と交渉してくれたお蔭で無事IDカードを手にすることが出来たのである。

いよいよ展示会が開催されたが、全く日本からの来場者はなく手持ち無沙汰の状態であるしブースに立ち寄るのはアメリカ人ばかり、英語の不得手な私に新製品の詳細な技術的商品説明などできる訳もなく、ひたすら日本人関係者が現れるのを待つのであった。



McCormick Place 会場



イメーション展示ブース

3日目にして「ドライビュー」を既に設置使用してくれているK大学付属病院の放射線技師のHさんがブースを訪れてくれた。

ストレスの溜まっていた私は砂漠の中でダイヤモンドを見つけたが如く、喜びの余りHさんに駆け寄り熱い握手を交したのであった。

Hさんは5人の放射線技師仲間とRSNA学会に来ていて今夜なら共に食事をする時

間があるというので、会場から市内のステーキハウスに予約を入れS室長にも同席し新製品の技術的な話をするよう頼み了解を得た。

しかし、その夜S室長はステーキハウスに現れなかった。S室長からイメーション社の最新技術情報を聞けると楽しみにしていたHさん始めK大学の放射線技師さん達をがっかりさせてしまったのである。現れなかった理由を彼は話さず、私も敢えて聞き出すことはせず気まずい関係が出来てしまった。

RSNA学会5日目の朝、気晴らしにアメリカで一番高い(442m)ビルディングであるシアーズタワーを一人で訪れた。

103階の展望階から見ると、ミシガン湖岸沿い広がるシカゴ市街地の眺めは素晴らしく、しばし息抜きする事が出来たのである。

時間を見つけシカゴ美術館、シェッド水族館を訪れたかったのだが、RSNA学会中、休みが取れず結局シアーズタワー訪問がシカゴ滞在で唯一の観光になってしまった。



シアーズタワーからシカゴ市街を眺望

16. 再度の転籍話、嘱託契約打ち切り(平成11年～平成17年)

●「ドライビュー」コダック社へ売却

平成10年に入ると全国病院の放射線科関係者ばかりでなく病院事務関係者からも、現像処理廃液の出る湿式銀塩方式の医療用フィルム作成イメージャーに代わる、廃液を出さない乾式イメージャーが環境問題の観点から注目されるようになって来た。しかし、未だに各メーカー共、乾式イメージャーのフィルム画像解像度が悪く極細の癌部位などを見落とす恐れがあると画像診断医から全幅の信頼が得られていなかった。その中であって乾式イメージャーの草分け的存在であるイメーション社はフィルム画像

解像度を湿式並みに改善した画期的な乾式イメージャー用フィルムを開発し平成10年秋口より発売を開始したのである。

このフィルムの登場により全国有名大学病院の診断医達から、イメーション社乾式イメージャー「ドライビュー」は高い評価を得ることになり、東芝、GE、フィリップス、島津製作所等のCT, MRI画像診断装置製造メーカーがCT, MRIからの出力画像を作るイメージャーは「ドライビュー」が良いと、病院側に推奨してくれるようになったのである。

イメーションの「ドライビュー」担当営業マンは、たった7名であったが、高い製品評価と言う追風に力を得て、月間15台以上の実績を上げることが出来る様になり平成11年に向け、更に販売台数を増やそうと新規設置病院開拓に意気軒昂の状態にあった。

そんな矢先の平成10年12月初旬、米国イメーションから驚くニュースが飛び込んできたのである。

イメーション社のメディカルイメージング事業をイーストマン・コダック社(以下コダック)に160億円で売却する事に決まったというニュースであった。

「ドライビュー」は世界的に販売台数を伸ばしつつあったが、事業内容の実態は研究開発費がかさみ利益を上げるに至っておらず、更に将来に向けての新製品開発には莫大な資金投下が避けられないため、苦しい状態にあったのである。

片や世界中の病院に販売網を持ち湿式イメージャーでは圧倒的シェアを持っていたコダックは資金力が有るものの乾式イメージャーの研究開発に立ち後れ試作機を発表しただけで国内病院への乾式イメージャー納入実績は全くなかった。

間違いなく乾式イメージャーに移行して行く趨勢の中、何とか乾式イメージャーの技術を手に入れ劣勢を挽回したいコダックと、出来れば乾式イメージャー事業を手放したいイメーションとの思惑が一致し売却交渉が成約したのであった。

イメーション社は会社設立2年半余りにして重荷であったメディカルイメージング事業を売却し、売却で得た資金を得意な磁気製品事業分野に集中投資、磁気製品事業に特化していく事にしたのである。

●転籍はコリゴリ

コダックへのメディカルイメージング事業売却が確定した平成11年の年明け、事務引継ぎのためイメーションのイメージング事業に携わる社員は日本コダック本社を訪問することになった。

単なる引き継ぎの下打合せと聞いていたのだが、日本コダック社長から我々を歓迎する挨拶、会社概要の説明があり、更にイメージャー事業部長から皆さん今日からコダック社の一員と思って「ドライビュー」の設置病院、見込み病院開拓の引継ぎをコダック社員と協力の上、実施して欲しいと言われたのである。

そして何と引継ぎに当たって、コダックが用意した名刺を使用して欲しいと「ドライビュウ」担当部門の肩書きと氏名がちゃんと印刷されたコダック社ロゴ入りの名刺が配られたのである。

事前にイメーションからコダックへの転籍など説明を受けていないし承諾した覚えのない私は名刺を見て唾然とした。

正確な我々の氏名をコダック社が承知し名刺まで作成していると言う事は、コダック側に氏名情報を渡した人物がイメーションにいるということである。

真実は書けないが、その人物は日本のイメーションでも、この際メディカルイメージング事業を人材ごとコダックへ引渡せば人件費等が減り経営が安定すると、我々に事前承諾を得ることなく説明することなくコダックに転籍させようと画策したのではと、有らぬ想像を掻き立てたのであった。

イメーション事務所に戻った私は怒りの余り、コダック社から渡された名刺をシュレッダーに通し粉碎してしまった。その後の事務引き継ぎ時には堂々とイメーションの名刺を使用したのである。

我々のコダック転籍を事前説明しなかった落ち度を認めたのか1週間後、急遽、米国イメーションからコダック「ドライビュウ」担当副社長就任が決まっていたU氏が来日し我々と個別に面談することになった。

U氏は私に、コダックがイメーションより大会社で経営基盤がしっかりしている世界的にも優良企業であり、コダックの販売網を持てれば「ドライビュウ」の販売台数は飛躍的に伸ばす事が出来るし、ハッピーな会社生活があなたを待ち受けているとコダックへの転籍を強く勧めるのであった。

私は転籍説明が前後になり人権を無視する様な、如何にもアメリカ的発想をする米国イメーション社の元メディカルイメージング責任者U氏の理不尽な言動が気に入らなかった。

そしてカメラフィルム、医療用フィルムでは世界の盟主であると言わんばかりの上から目線が垣間見えるコダックの社風が私には合わないし、イメーション転籍後2年半足らずで再度転籍に翻弄されるのは、こりごりであると私は後の処遇も考えずコダックへの転籍を断った。

本音はコダックの支店網が札幌から福岡まであり、当時東京から出張で愛知、岐阜、三重、北海道を担当していた私はコダックへ転籍すれば転勤が有り得るし、一回りも歳の若いコダック支店長達と仕事をする自信が全くなかった事であったのである。

転籍に同意したのは20名のメディカルイメージング事業関係社員の中でシカゴ北米放射線学会以来、気まずい関係にあったゴS室長と新人の女子社員の2名だけで

あった。

平成19年米国コダック社は医療用フィルム事業をカナダのオネックスに売却、平成22年1月には破産法申請をしている。

仮にコダック社に転籍していたら、どのような人生を歩んでいたことであろうか。

●磁気製品に始まり磁気製品に終わる

後の処遇も考えずコダック転籍を拒んだ私だが元同僚のS事業部長が救いの手を差伸べてくれたお陰で、古巣の磁気製品事業部に戻る事が出来た。

そして新宿価格戦争時、私の部下であったA部長の下で働く事に成ったがA部長は何かと私に気を遣ってくれたのである。

記録メディア製品の世界はオープンテープ、カセットテープ、ビデオテープと変遷の歴史をたどり、私が磁気製品事業部に戻った平成11年には板物(テープでなく丸い盤)と呼ばれるCDR、DVDなど磁性粉を使用しない光ディスク商品が主流の時代に変わっていたのである。

CDR、DVDには一度しか書き込みできないCD-R、DVD-R、繰り返し記録出来るCD-RW、DVD-RWとメディアが異なり、更にプラス方式も存在すると言った具合で、方式の違いを理解できず商品知識を吸収するのに大変苦勞した。

古巣の磁気製品市販販売部で少しでもお世話になったお返しが出来ればと仕事をしたが、平成元年ビデオテープ新宿価格戦争の折、値上げ交渉に再三出向き、お世話になったヨドバシカメラのK常務、BICのY常務に再びお世話になるとは夢にも思わない事で、サラリーマン生活の有為転変をしみじみ感じるのである。

当時のスコッチビデオテープには製品の優位性があり、知名度も高かったが、イメージブランド商品は残念ながら知名度が無く店頭売り上げが伸びず、お二人の折角の好意に応える事が出来ず歯がゆい思いをしたのである。

60歳を迎え、嘱託社員になり後輩の営業指導をする等、営業の第一線で頑張っていた積もりだったが、62歳の誕生日を祝って間もなくの平成18年6月2日、会社業績の悪さから嘱託社員契約は継続出来ない、若い後進達に道を譲って欲しい旨、通告を受けイメージオンを退社することになった。

昭和49年9月住友スリーエムに中途入社して以来、記録メディア製品の販売に長年携わり、一時期メディカルイメージング事業の仕事に関わる事もあったがサラリーマン生活の最後を記録メディア製品の仕事で締め括ることが出来たのは私にとって大変

幸せな事であったと感謝している。

私が退職した後の平成19年春には記録メディア業界のトップに君臨し、住友スリーエム時代から何時の日か必ず販売シェア一歩追い越して見せると、我々営業マンが目の色を変え挑戦していたTDKの記録メディア販売事業とTDKブランド使用权をイメージンが350億円で取得したのである。

日本でもTDK販売会社のTDKマーケティング(株)をイメージンの傘下に入れる事が発表されたのを聞き、「昨日の敵は今日の友」と良く言ったものだと記録メディア業界の再編劇に驚いたのである。

イメージン社員達はTDKマーケティングから転籍してきた人達に高慢な態度を示していないだろうか、TDKマーケティングの人達は転籍の悲哀を感じていないだろうかと関係ない部外者であるが余計な心配してしまう私である。

●立教セカンドステージ大学入学を決意

イメージン退職から立教セカンドステージ大学入学を決意するまでの経緯はセカンドステージ大学入学出願に際し提出した選考課題エッセイを以下に貼り付ける。

「自由の王様」

「君達がここの特別養護老人ホーム（以下特養）に入居したければ私の力で何とかしてあげられなくもない。だけど我々の年齢で今から特養に入居することを心配するのは良くないよ！特養に入るのは最後の手段。特養などに世話にならず日々

健康で自立するための方策を見つけ、充実した老後を送ることが先決、それが老後の幸せに繋がると思うよ」

将来、要介護の身になった時、家族子供達に心配を掛けたくない。あわよくば高校同期の友が理事長をしている特養に入るべく手を打って置きたい、特養の実態を知りたいと同期の仲間が特養「太陽の家」に集い意見を拝聴した時の理事長の言葉でした。

退職から1年5ヶ月も経つのに「自立するための方策、充実した老後」を真剣に考えていなかった事実直面し恥ずかしく、友である理事長の言葉が私の胸に重く響きました。

仲間ともども「健康はそれぞれが気を付けるとして、自立するための方策を個人でなく共に考え実践して行こう。そのために先ず一ヶ月に一回会合を持つ」と決定したのが平成19年11月中旬のことです。

その時から遡ること1年半、62歳の誕生日から2ヶ月余りの6月「今四半期の利益率が悪く先行きも厳しい見込みなので、申し訳ないのですが7月からの嘱託契約更新ができません」如何にも外資系会社に相応しい上司からのクールな内示です。

「何故！半年前には65歳まで嘱託社員として頑張って、若い社員を育成して下さい。あなたの経験と知識が必要なのです。と言ったばかりだろ、ストレスが募る営業マンとして率先垂範、しっかりと若い連中の面倒を見てきたし、営業成績も上げて来たではないか！」

「分りました」の返事とは裏腹に腹の中は悔しさを煮え繰り返っていました。数日後、冷静になって思うに「自分なりに営業成績を上げ会社に貢献、役割を全うしたとは云え、会社の利益が改善出来なかった責任は自分にもある。嘱託社員が身を引くのは当然かも知れない。この歳まで雇用してくれた会社に感謝し、将来性のある若い社員達を信じて潔く去ろう」自惚れていた自分が恥ずかしく反省したのです。

そして身を引くと決めた時、頭をよぎったのは30数年前読んだ、城山三郎の小説「毎日が日曜日」です。読んだ当時は小説の世界の事として理解するだけで自分には遠い先のことと高をくくっていたのが、いよいよ自分も現実に「毎日が日曜日」の生活に突入。会社に拘束されない「自由の王様」の地位獲得です。小説の中の登場人物は老後の生活設計を準備していたのに、私は準備もせず、ただ読書三昧の日々を送るために自由な時間を使おう位の事しか考えていませんでした。ですから後日、同期の集まりで思い知らされる「自立のための方策、充実した老後」のことには全く思いも及んでいません。

いよいよ退職、時間は全て自分のもので「自由の王様」の地位獲得。小説を読んだり蔵書のデータベース化に励み、更に社会見聞のためにと航空会社の整備工場、マヨネーズ工場等々見学しますが現場で立ち働く人を見るにつけ羨ましく、気楽な自分と比較して何かと考えてしまいます。更に学生時代の友人訪問の旅に出かけ旧交を温めても友人は嘱託社員とはいえ現役の身、仕事に対する熱意を聞かされ、旅の後には楽しい思い出より空しさが去来し「自由の王様」の心は揺れ動きます。

この状態を続けるのは不味いとの焦りから、ハローワークに出かけ求職登録しますが62歳過ぎでは正社員はおろか、パート職でも営業経験を活かせる会社の求人は見つかりません。退職の身で何の資格もないにも関わらず、現役時代は役職者の立場にあったというプライド、世間体を気にする「自由の王様」はマンション管理人、ガードマン、清掃員などの求人には見向きもしません。

数ヵ月後、「自由の王様」は心を入れ替えねばと一大奮起、プライド、世間体、

給料の多寡など気にせず全く新しい分野の仕事に挑戦しようと、水道メーター検針員に応募したところ幸運にも職を得たのです。事務職を除けば60歳以上の元企業戦士の社員が多く70歳過ぎの老人も元気に働いており、お互い気心が知れ今までの勤務先と異なり楽しい職場環境です。しかも毎日徒歩での外回り仕事のため健康にも良く、この検針員の仕事を長く続けたいと考えていました。

しかし入社2ヶ月後、半年前に黄斑上膜手術を受けた左目に疲れが溜まりアナログ水道メーターの指針が読取りにくく、検針ミスがあれば請求額で水道利用者、会社に迷惑を掛けることになると、長く仕事を続けようとの気持ちとは裏腹に悩みがつのります。

そんな矢先に高校同期の「老後の自立を考える会」の発足。母校立教大学からのセカンドステージ大学設立の案内が重なります。「シニア層の人たちがセカンドステージの生き方を自らデザインする」という設立の趣旨が、正に「自立するための方策」を探求しなければいけない立場にある自分の思いに合致したのです。

老後の自立問題を解決しないまま、ただ漫然と仕事を続けていても、きっと後悔するに違いありません。中途半端な「自由の王様」とは決別して、まだ視力がある内に、単に教養を身につけるに止まらず自己変革するのだと言う強い意志を持ち、出来れば同期の友と社会的活動が出来るように成りたい。お座成りな勉学でなく、しっかりと軸足を老後の自立に置いた勉学をしたいとの思いが膨らんできたのです。

12月中旬、立教YMCAOB会でクリスマス礼拝にチャペルを訪れ、蔦の絡まる本館、クリスマスツリーを見ながら、自分の老後の飛躍のために「自由の学府」母校に帰ってくるぞと強く心に誓ったのです。

以上

平成20年4月、お陰を持って立教セカンドステージ大学に入学を許され、この様に拙い「自分史」なるものを書き記しているのである。

あとがき

平成19年2月、左眼網膜にゼリー状の膜ができ失明する恐れがある黄班上膜と言う病名診断を受け、浜松聖隷病院で手術を受けた。

失明は避けられたが左視力は0.05程度で物がはっきり見えない状態が続いていた。更に悪いことに平成20年2月の術後定期検査で緑内障を発症している事がわかり治療してはいるが左眼失明の危機にある。

そのためパソコンに20分も向かっていると、左眼は芯から疲れ痛みさえ感じるし正常な右眼も違和感を覚える状態である。

家内からは根をつめて自分史を書くことはないと再三注意されたが、私としては左眼が失明する前に書き上げて置かねばと、何かに取り憑かれたかのようにパソコンに向かい点眼薬を注しながら自分史を書き続けたのである。

恥を忍んで幼年期、少年期の母との確執を書き上げ、第一子長女死亡の箇所では書きながら涙が溢れ何回書くことを中断したか判らない。

家内には結婚前の私のことを余り多く語って来なかったし、長男、次女にとっても尚更のことで、今回の私の自分史を読み初めて私なる人間の一端を知る事柄も多いと思う。

ビデオテープ新宿価格戦争で精神的に参っていた頃、住友スリーエムからイメージョンへの転籍、更にコダックへの転籍話しの頃など家庭を振り返る余裕がなく不機嫌な態度を家族にとっていた。

今更、許しを得ようとは思わないが、私の自分史を読み、あの頃の私が不機嫌であった原因に家族は思い至って呉れるかも知れない。

家族の事や、今後も付き合いを重ねて行く親友夫婦、近所の親しい夫婦の事など書いておきたい事は山ほどあったのだが、書き記す事が出来なかったのは残念である。

立教セカンドステージ大学に入学し立花先生の講義を受講しなかったら自分史など生涯書く事はなかったであろう。

今回、自分の歩んできた人生を振り返る事ができ、しかも文章にして残す事ができたのは、この上ない喜びである。

今後は文章にする事がないであろうが、自分史の続きを家族と共に死ぬまで刻んで行くことになる。

身内の叔父が亡くなった後、縁ある人々から叔父を偲び追悼集が出版され頂戴した事がある。

追悼集の内容と言え、故人を称える歯の浮く様な文章ばかりで生の叔父の姿が見る事が出来ない。

私は死後、追悼集など出版して貰える様な人間でないし、その必要もない。

私には赤裸々に己を書いた自分史がある。自分史が追悼集になる。

自分史のデータをSDカードにコピーして保存して置くので、私が死んだ際にはSDカードを棺の隅にでも添えて欲しいとだけは今から遺言しておこうと思う。

以上

継 潔「自分史」完

Web版あとがき

立花先生の「現代史の中の自分史」を受講し、十分に推敲もせず、慌ただしく「自分史」を書きあげてから早くも4年の年月が経過した。

Web版として提出するにあたり久々に初稿を読み返すと、当時感情の赴くまま書いたせいか不適切な文章内容、言葉使い、助詞の間違いが少なからずある。

「自分史」は飽くまで己のドキュメンタリーであり決して創作フィクションではないので初稿を大切に、手直しすべき個所の削除、修正は最小限に留めた。

誹謗、中傷は避けるようにとの指摘に囚らずも原文をカットした箇所があり、前後の脈絡が不明になっているのは否めない。

読まれた当事者が事実と反する、誤解だと思われる点があるかもしれないが、私の記憶違い文章力の欠如によるもので、責は私にあり不徳の致すところとでご容赦いただきたい。

「自分史」に登場する中学、高校時代の友人、会社の先輩、同僚、立教セカンドステージ大学で共に立花先生の講義を受講した方、更に実母、義兄、義母が、4年の年月の中で残念ながら天国に召されてしまった。

しかし、その方々は「自分史」の中にしっかりと留められ生きておられる。

記憶力が低下する一方の私は、これだけでも「自分史」を書いたことの価値、意義があったと思っている。

立教セカンドステージ大学に入学、現役大学生の時より勉強に励み多くを学ぶことができた。更に嬉しいのは男女の別なく多くの友人ができ卒業後「読書会」「アジアの貧困とNPO／NGO支援委員会」「山楽会」等々の会に参加させて貰い遊びだけでなく彼らから見識ある知識を貰えることが何よりの宝である。

「アジアの貧困とNPO／NGO支援委員会」に関わらなければバンングラデシュまで出掛けボランティア活動など決して出来きなかったであろう。

この度、立花隆先生による「自分史の書き方」が出版されるとのこと大変喜ばしいことです。

読者も記憶が定かな内には是非、文章の長短、良し悪し関係なく「自分史」を書き始められることをお勧めする。

平成25年11月

